わかの葉 下

和書門 類
一七六八五 號
一七八 函
五 架
五三 冊

内閣文庫
和書 類
一七六八五 號 (42)
五三 冊
二〇二 函
三二 架

内閣文庫

番號	和 17685	
冊數	53 (42)	
函號	202	350

国立公文書館
National Archives of Japan

若菜下之上

四十一歳
衛門督奉恋女三宮為病事
三月晦日六條院弓會事
衛門督参東宮申賜女三宮御猫事 同変猫給事
蛍兵部卿嫁真木柱姫君給事 外祖母大宮取持給事

四十二歳
四十三歳
四十四歳
四十五歳
四十六歳

此巻詞云 ことはりとは思へとうれたくもいへるかな
[illegible]十八字

書籍館印
日本政府圖書
淺草文庫
和學講談所

かくてましかたし

冷泉院也ておりゐさせましまし御子なくて

みかと十八年ありけるをおりさせ給ふ源氏

四十二との四十の年也源氏かたはらいたく

（しとおもひて今日をつたへて心えへし

うつりかはるなかへし

春宮受禅事今上是也

太政大臣上致仕表事

鬚黒左大将任左大臣為摂籙事

六條女御々腹一宮立坊事

夕霧右大将任大納言事

十月廿日六條院住吉詣事

女御殿對上同車事　明石御方尼上又同車事

女三宮叙二品給事

紫上養明石御腹女一宮給事

花散里養大将藤典侍腹三君給事

為明年朱雀院杪

源氏奉教琴於女三宮給事

四十七歳今上在位

正月十九日女楽事

二女三宮琴　明石上琵琶　紫上和琴

明石女御箏

御方々花喩事

源氏君与夕霧大将音曲事

其夜源氏君渡紫上對御物語事

人々御事語給事

宮をひとし廿七日の夜ふかくしてそれより三年
かの遊びすまひとは四十ばかりかはりに給へり
夕方渡女三宮御方給事
自暁方紫上病胸給事
御賀延引事
三月紫上渡二條院給事　二月中下木服事
衛門督任中納言嫁娶朱雀院女二宮事　落葉宮是也
衛門督物語小侍従君事
四月十餘日御禊前夜衛門督密通女三宮事
衛門督独吟哥事　落葉宮哥也
六條院渡女三宮之日紫上低文絶入仍立帰事
物氣出現事　六条御息所霊
紫上御受戒剪額髪事

六月紫上少験事
女三宮自四月比懐妊事
源氏渡女三宮御方給事
衛門督文小侍従奉見女三宮則捧茵端給事
源氏求扇之次見付茵端文事
源氏渡二條院給事
小侍従以源氏見付文事語衛門督事
源氏又渡女三宮給事
二條内侍上出家事
源氏遣文有返事事
朱雀院御賀依女三宮御悩十月又延引事
山御門送文於女宮事
十二月十餘日御賀試楽事

衛門督祈病不参源氏為給事
衛門督試楽未終早出病悩事
衛門督離女二宮渡父大臣御前事
明石女御又生男宮給事　匂宮是也
廿五日御賀事

若菜下之上　河ー此巻の名なりのはりこと
諸葉か中にひとしきへの哥によりて
当流不用之
花　小詞為巻名　或本上をしたもしにする
冷泉院御年十一歳二月の事まて上をしるし侍りて
同年の二月より当年ほとにへていたつ
御年二十より御年廿の年まて四年うつり下ふ院
御年三十七の年まての事なり
中宮年のほとなとより[illegible]の御齢[illegible]
くらいとにらむ[illegible]月とうちくくらく[illegible]みかとの
[illegible]かくなりにけり[illegible]給
まゐらせ[illegible]
冷泉院御在位御年十八年[illegible]

うちつけにまたくやしかるべきにこそ
寿
若菜の神なり 源氏の君 第一より 第十三巻の
末まで此上なり 分て 前と云ふ 初めの
ひと巻の多しなりともくはしろうかし 此上の
六條院の御栄華 朱雀院の御栄 上下なりた
ことも細なるをかしきことなり
上巻のおくりしるす 事をもわり 小侍従
のくはしく 書も ひとつひとつ 心つくすまで云て
源氏四十七帖 二帖まで 第十巻の是伝ふことし
書り
第二の巻より 第十三巻の作者 年ある六の
時なりけるとか
若菜上巻 第十一巻 二月 末までの事を 上巻なり

わりをなし
ちかきまでも 上巻の下帖を 二月の末まで なり

ひくゝりと、足もともからめても、いつかたへ行かれ
松 松永殿の発句をおもひしたまひてなして
小侍従なり おつれなは、つねにしたまふて正筆なり
まことなりしに、天神の桜は、その桜にたとへて
くらひ侍従もけりし、ひとつとしては正しくもさりて
しかもたしかに御所まいれて、たつて上の思
かたは歌の詞のつくつくと思し 皆たれのゝ縁よ
なかいつなし
ゆ 名残をおしみてしきり
そ 三栄其のあいさつして いつら
松 小侍従が正筆の御所なし
いつやらの袖もあり
松 小侍従なり 首尾つゝけて申せしに 信長にてさる

とよめり
流るれは心まかせ　秘　亡業流や
なりそちらを切りとて法のゆきかりとかりなり
心ありてこゝろかせ給ひて
作ものはてむしく
秘　三月はてむるし　又上巳の楽あるし
月し三月より
うきよとふりしもを　法之桃花の宴
心は御心の桃花うちをかりいんして
まくらくら
とものもとの宴のよ　かさの心あそのを宴し
禊上巳の御せきをみてきさらきて
花　天人上巳躑躅三月の御まゐりて白薬の

后の御忌日月忌なりとて停止せられしといへり
忌月の名は唐朝より此憲穆帝よりはじめ
を始めとして九月九日を忌月といふことはじ
まれり紀にもあり忌日を事て忌月を忌むとし
忌月あるも忌歳をもつて忌むとす
大唐武后のころ牡丹をつくしてまゐれと
しるし凱歳の御かなといへとも是れにて高帝
の忌月にやと根本なし晋穆帝にはじ
まり漢の草を給ひて事をいはれ
事ありて給ふ忌月にたつ事ありて九月
九日の事も無き帝の御忌月ありてのより
て十日より給ひて議蜀の宴をたん
年に出て法令に去年給ひて文粹よ

なくて
故弓會始ハ正月前にありしを
其後の代に改て今のことくなりしとそ
河海抄云殿上賭弓前後頭於殿上取方人充
文下依次仍改書押小壁四府中点形名為出居形
云々
設饗定陰陽師出居━━参内解除書召文作事主
上御射場射手着座王卿依召定方人奏前後奏出
居令懸的矢取渡的付着座筭刺着座召方々弘被
仰渡数令人賭者主縄射勝方拝王卿以下主縄射
追出懸物御召所々掌令書分前後所掌着的付座
付座次々射弓々々有中科者抄
李部王記天暦五年三月十六日殿上賭弓忌月事

賭弓　正月十八日於弓場殿射之　四府公卿以下来带杖
[illegible]忌月[illegible]
故母后[illegible]
忌月[illegible]例[illegible]
後[illegible]御代十六日[illegible]
[illegible]
こゝに[illegible]
故[illegible]
公事[illegible]
松[illegible]
[illegible]
[illegible]
月[illegible]

[illegible]

河　歩射　騎射　歩射　和名加知由美

李太歩射法云夫射以自先領其持心射之

今案持心者的名

李部王記承平三年三月十六日殿上侍臣於[illegible]

院歩射

又天暦四年十月十五日試春宮帯刀坊亮以下

頒試先試騎射次試歩射

[illegible]

弓　まうけ　いとかしこく

一品　大宮の御かた二御まうけとも

まうけとも[illegible]給ひて　　ゐ　言ひ給

なりけれは　[illegible]給ひて

ゆふなりつゝ[illegible]　かくて[illegible]中宮より

ゐなかの人

わかうとたちのいと[illegible]給ひて　　かつらきの—

えんあるかけもの

ゐ　[illegible]よりさまさまの

西宮抄云賭弓　注　進錢　自殿院進　倉

延喜十二　御息所被出女装束　　出懸物　蔵人給侍出

延長四　中宮被出装束

柳　かちまけ百なむとしてあまたなりつゝ

河　史記云楚有養由基者善射者也去柳葉百歩

而射之百発而百中之左右観者数千人皆曰善射

秘　養由基とし云けむ上手とも

[illegible]とも[illegible]

弓[illegible]

[illegible]なむ　　上手とも　[illegible]

さらひてあそひ給ひて

まうしきてけるにいとをかしくて　　巨ゝ敵

弓[illegible]　　百しひあそひて[illegible]

とい[illegible]勝負[illegible]

いとしく[illegible]まつ[illegible]

[illegible]

法[illegible]はよいつり

大かたにさへ　なかむる暮

人しれぬすみかのゆふくれ　柳まの梢さへさかせ

ことはしくさむる

紹　夕暮　かなしさかなしさ　宗牧も又夕暮に其身を語

しめやかなるあはれはかなりて

世をのかれしふとろもさへ世をうし

比類なきゆふけしきは常なりし　玄　孝佐

顕れてさひしきはたゝ言詞の便

ふかくとも　紹　そのし　にし

今はて人に伝ふる

紹　今はかうしのなさけなる一哉事に

以　近人の冊の批点をかくはいまに慶長しつる

たゝいまは詮にうるまにれては今は添かたし

らるすかしなき

これにてそのは事もなくなる　柳の名かとも見え

年つくへてもいまく事に仲にもまても事にて

十代のなくなり

紹　弘徽殿にて　しりぬの見物

かくおもひの　見る事のにて　さまし紹にて

ましくもつの子をきなし

かくてはかね中くは　世をもの事に

弁　かこ紹すおもひあいさして

紹　見てかりは不二すく　心にも当にかなふ

かくてそれて　これもすいしては柳本も伝へ

これはひとつのてもいへるひとかひなのと

かけかなり　紹　かけわるをかけて

まうのりはいくましく
よ 菊のしめてのゆるへしまし
ね 女のこゑのくもわかくゆのましくまゆ
下のまてはいく ゆの篇 ゆ篇
うるのこゆ
ゆ ちえ女のえりゆくゆくしく
のくりしのゆるのの篇
扨 東手のゆくのゆつくましくゆるくるく
くのゆくこ ゆ 柳手のん
んれ 小右記云長保元年九月十九日若内裏御猫
産子、女院左大臣右大臣有産養事、有衛童垸飯納
宮之猫乳母馬命婦時人咲之、奇怪事也、天以目若
是可有徴歟、未聞禽獣用人乳諸乎

河 寛平御記云、寛平元年二月六日、朕閑時述猫消息曰、驪猫
一隻、大宰少弐源精秩満来朝所献於先帝、愛其毛
色之不類、餘猫云々
皆浅黒色、此猫深黒如墨、為其形容悪如韓盧、長尺
五寸、高六寸許、其屈也小如秬粒、其伸長如張弓、眼
精目明瑩如針芒之乱眩、耳鋒直竪如匙不揺、其伏
臥時団円不見足尾、宛如堀中之玄璧、其行歩寂寞
不聞音声、恰如雲上黒竜、性好道行、暗合五禽、常低
頭尾著地、而徒聳脊高二尺許、毛色悦沢、蓋由是
亦能捕夜鼠、捷於他猫、先帝愛翫数日之後、賜之于朕、
々撫養五年于今、毎旦給之以乳粥、豈啻取材能之
翅、擬因先帝所賜、雖微物、殊有情於懐育耳、仍而曰
汝含陰陽之気、備支竅之形、心有必寧知我乎、猫乃

歎息峯首御覗吾顔似烟心盈臆口不能言 手

あさましきつまと　母　内裏の御徳の子は有く

りとらはつくあらしく

秋　御の母御にてありけるかつくり　わたさなく

六条院の姫君の御つかり

柏木の衛門督の御つかりまし

えてのは母しれる　ふして君まれたのみて

わこ日よしらして

秋　まこ大御母君しきこえらんて

口しわそあいはかりするへき　秋　柏木の衛門

かうし村けるなり

秋　御母御しよ給ふ母君なり　柏木の御すゑ

わつかにたらく　羽衣中天よりくだる

御母女三宮まいりて内へまいり女

なりけんしかはしつらく

秋　まこ女の三宮御あとにて内裏へまいりて

えうしまへわたら

朱雀院わたりけ　かりしけみ朱雀院

わしへのみかくはたしかし

みる母なも　秋　まこ女　むしりまこ女

とおもしましくて　かけ枝なおらく　母

いつかのみなうれ

母　御母女三宮よりかへりて見えしく

む　たえまけれは　いふんしへと云一ふたる人

母しいへるし　言傳のにおもしたる人とくみ

いとんや言傳の御かや

国立公文書館 National Archives of Japan

女　かしこまつて候　[illegible]くしや
人々様も御しやうも[illegible]
まゐりて候所　女　[illegible]
こなたへ参るやうに[illegible]
女　かしこまつて候　聟[illegible]
まゐらせて[illegible]
まことに[illegible]
かしこまつて候
一説　まいるとも　多くさうて[illegible]
さうらうとも[illegible]
人に[illegible]
女　聟の[illegible]
それ[illegible]けり　聟[illegible]

メウセ　[illegible]
[illegible]
聟　[illegible]
まことに[illegible]
[illegible]
まことにさらにしや
男　聟の[illegible]
女　聟[illegible]
立帰る人[illegible]
[illegible]
女　[illegible]
男　誰[illegible]
[illegible]

唐武宗時高妃後身為猫事 并

[illegible]

[illegible] 迷上 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十二月[illegible]十余日[illegible]

廿[illegible]二月廿[illegible] [illegible]

[illegible]

二[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひらしのうへに　白萩ちりて　萩より一葉のえた
つゆにおもしく萩ちりけり
すゑ東作り枝ほそし　むかし不審し
四又　其後は　明くに中六段　是句六二句
世事經てや永二九年九月尾　作是にて一し
此悪句桐葉し
秋　明に女作の此云て事起て京ひしき落作
みえのまし二の事作りおもしろやなれと見
なさく其の句ましく
すゞしいかしけれく
此　此女も此湯治旅也　作のへし此て
すゞかよしいつちりし
ありくり　大なるとのなか[三キノオホトノ]　萩集の北方申うこと

ス事更らしつるの所ゆく
る行とて名高ふしころの所ハ花落星なりし
をすかゞくる事ゑ　洞楽
さるて此事すれて　てるいさの中りしとかくつ
のなかさそ　前　初るる星作り
おまえるりのハるてすこん
秋　こまふる星あるとなく事し作あま列よ
識楽ハて物りハ出しかくあし
中るしく又あり京見すなとて　すむいさひとく
しかお申すぬ事作こ申りいてあるえて
枝しこ更　秋　論よて
中るつしなか仰りしとくまで事し
こみらえさうりて

地 まつらの山ふかくたつねかねてし
御さらしの旅衣　かのわかれの旅衣
かなしさをしのふらし
下 いのりにけりて　出上文
宮の御いのり　さては宮の祖母
人これをみなと　さりとは宮の御
上 光帝の いのりにけりてこのうまい
心こゝろのかんらむ
地 いのりにけりて帝の御つて
この後たより　上 御なか　ふかきたて
太相もこの世のならいして　上 御あそし
旅なれのかなしさ
地 仏はなりつみてまれに雲の上にのほてさりとはかる

とおもへ
たちまちの雲のうちにひかりかゝれ　雲路のそらに
わかれのみ
神もこゝろあらなく　地 まことにて
上 おほくのいとしの道のへ
峯にかかりぬ　雲のやかて　地 なさし
松にしかる雲よりさきにしひく
地 みちのわかれのゆくへいくつの雲にまかせく
さくらの花のみ　いくすへて
地 さらにしひつし　身のなきなかくして
はるかのりかけしきをして
地 いのりにけりてへいまらんかへりて
大かたや　あはれなし　上 いのりにけりて　出の上文

弁　式部ハ下のさゝやき
松　式部にていふハ女の三ならし
ま　式部への二宮まいり行の御縁なし
松　似たるおもハ不言(?)式部にて兼ねてまいりまゐ
あらハし　式部にて女房を冬(?)しけしる式部
うまれてさきなの頌(?)り二十みちるけるなり
このゆへなり
いとしも中なし　松　中なく紛(?)ゆゑ
ひこ此ハかくいふなみまなと　冬ふ覚あらし
松　おもはる給ほとに思し給ひて
たくひ女にはあらせさ
松　信(?)女さ紫式部の宝讃(?)行てゝ大弐三位
よく知りて申せしも物語中なり

まかせかく辰(?)りこゝの一事もかしく
弁　式部の少女の内名にしてまいり物の母は絶名(?)
とこれまて御人大弐三位ゆくし内りまいらせ給ひ
しも物語中なりけりとまいらせて一事もあらず
ありしと云て
私　弁もやりこゝろ人たまふ給式部をへれ今そ
入るまり不言
ゆへにしかへしけるて
松　物女ともへこひらしめのうちにいかにも仰らる
さなしと
とく言ことひ中きしてもよ　物語の母なと
大い中りとくも宗下しにたくとてすく
歴名にすれ物の名給ひつのすへかりし給ハ

ぬかしく詠歌しうすふよと
ゝ中へてうせてましけりなるか小まゆ
井　萱兰へ三ゝの小まむなへてまゑ
松　萱兰へてりゝの小まむ云ゐてく　壬形子
御くつかれてゆく印くゆしつて
同　萱つの小方ハ二重桐の女ころゝのへの
本りや　萱葉のまゆまゑなり
去もりさらゑの新傍ゟ人ことき　御事ゟ玄書
わくハおれゝし
山まハ梅花てもくゝうまあしかくあとて　ゑとゝの
かまりつとれの吸し
石ゝや
母ゆゝもはしもしつゝし　松　まゆ傍の宮母し

人しゆきてころもまふ　緒花のへと　いろとかね
つまゐりてハ萱ころゆてふゝかし
ワけりやまりしまてハきかし　緒恩人か二へんな
乳木をしりはるやよへ抑しと良ひさゝて
んりつて　松　印ゆくや
くろのそしけかれ
松　姉云アてゑゐむおくら　しころウき仰ゐおれ
そまつおいのつゝゝり　秋もゝのつきかうしゝせ
ころしくさて
そのつころもまふらく　みおこゑんて
行くなゝつてのんまし　ゑの傍も萱へつしへてしよハ
きうしつせん　つしむさけり　ゆかうとあさましさ
緒恩てく母まかりむかの本ゑく　しおれかや

国立公文書館
National Archives of Japan

こしてゆくは海士人とてかくころもしるし　さて
まれなる人は中にたくいもさきかへりのなかのあらは
みなみなもちろん草のすゑまでも人ゆかんはし
でゆるゆゑ
さらしころもつけてまた
松　むかしのまつしは　まれ松のみぞわかるゝしるしとて
やしのもとのゆかりのしるしにて
松　まれ松のみどりしをきまつて　松　むらさめ
母　むかしのかたかまれてのみどりしそとひ
しひつきつかまれ松のあゆの袖のえて行こ
松　かなうせしきて　しやうは苔のみて松
かし夏くしひさましてかつてしむかしの方
かしらへかつてしてひとつて　まつ枝
かえしてもうすむかしの枝のうちにそこをかし
こく行母へしもひとすつてこかりえしそて野辺
すみかへおもひしにそへて
母　むかしのかたのかかくいてなくいく紫
かう筋もせかしのかわかれきれたるの
かくしくもとも
かはるこかすみきいのかすの　もしさつてあふせ
まれにしらの母あとのなかし　前て人后と
いつかたそこかりくゐつ　しぬかねつの
こしやかて　前もしそすていてて　手とも帝
かしれまいのち行し
みそらいかとしかり　ニてかすく
松　くかし方納

弁内侍のかみしくらゐにうつりてさふらひし
なりしかは
抄 人の中にさふらひて内侍のすけにまうしけるを
ちよかハさ中つ中にうつりて人内侍とし思ひしを給ひしと
なりし
なをもよりつきのもとしけり　抄 兼三アリ也
かゝさしはかりかゝやかし
兼ねのまゐらせたりし御禊をとりつき申し
をしとるへき中にはる
抄 二ところはいとゝおほえて此後は御禊前
なかりとかくしたてる
くらゐにありてさもかしこく
抄 御代四十一にて四十五にて事終りけるとこそ

明かに御事を申しけるたう
事この中にありし
内のうへにさふらひてあからさまにしてさてとしは十二月よ
かんをさゝりて
河　仁明天皇治十七年　承和十四年嘉祥三年
十二月に崩給ひてし新帝の御即位
まかりてとうして
請和天皇治十八年是貞観

無絶嗣例

朱雀院 昌子内親王　後一條院 章子内親王 馨子内親王

冷泉院まて御子二十余人みなまゐらせ
ありしもいかにしのひ給ひて御子
四十二にてまします十八年に崩ましし

十八年立位請和天皇之例也

秘 十八にての御ゆつりは　此先御年の御ためし
まれなり　十七まては　又の十八年ありけるをきゝ
ためしなきにもあらす　ひとつの御年をとらせ給
ふとし

冷泉院譲位　今上即位 御年四十六歳　十月に御位さらせ給

ひしもつねのことなれと　二月に女院崩

十二月に御年の事の聞えありしに

冷泉院の譲位の御ためしに十八年まてはおはし

ますかくては人々もみな思ひ申しき　孝和二

御年のほとまて

世中さわかし

御代の事

安 冷泉院の

秘 御年の御ことはあやしきまて

なかく侍りし

安 冷泉院の御ためしにはあらて十八年まてにおはし

ます　いとかくは御年のほとよりもすくなくおはし

ませはかくのみありけれはと

ましく

河 依御薬俄脱屣摸延喜例也

秘 李部王記 陽成院依御悩脱屣而[illegible]

おほくは御年のほとよりも[illegible]

ましく侍りしそかし　秘 御年の事

太政大臣ちかき御年をはかりて　太政大臣致仕

の例ありけるとて

但天暦三年正月三日是日太政太臣致仕表従中

務省奏進有勅答而不許云々　見李部王記

安 御年の御ことはありけれはと

冷泉院の御代々に太政大臣いとまを申しける

中位とよてきゝみかりよくく又職を辞して致仕
せんとありつ
四十致仕の冠をとくかけて
一勤とらうを出仕せよく退かるとかめしらせて
と給ひ一冠を入れきまし
年始のきさらかやうらみかな
詞　東観漢記曰王莽居攝子宇諫莽而莽誅
之逢萌謂其友曰三綱絶矣不去禍将及人即解冠
掛東門去後漢書逢萌字子康北海人掛冠避世牆
東陶弘景神武門掛冠去
たくわた大臣　女ひけふる　門奴　宮中かきまて
詞　栗田関白道兼　干時右大臣　摂録
女院のえとくりしるかれ代

抄 入　形音所の女院　熊野の御幸し
今上の御母女院也　女
うけさせ給ふをりの御
院と上の御母女院に緒所のかさなりて
まつりごとの　けふ　人あまたなりて
二條の女院の二三
抄　おりし中天　女羽衣中天ともの雨て
たへかねる御のさかりのなりてはれ
ひめ
女 夕ぐれに来りあなたに侍りけれ
ふそうれ人をさはかくもひなき
冷泉院の御次 醍醐
抄 朱雀院のかくさくつたへきまてあいしり

除とは院とこそまうせし　冷泉院と申く
ならひなり
それよりかの御所冷泉院とて　かれは
冷然院とかきけるを此院たびたび焼亡ありて
さる冷泉とかきかへられしとなん　たまさかに
冷泉院といふ名になりけるにやときこゆ
昔はてもありけり　西南
こゝは帝皇系図云　弘仁十四年遷于冷泉院為冷
泉院
此冷泉院世にありしかの冷泉院と
まうしし冷泉院なりけるとぞ
冷泉院　大炊御門南二條北堀川西大宮東四町
累代後院也　嵯峨天皇御宇造此院　弘仁十四年十四月

十一月天皇遷冷泉院　十七日譲位皇太子遷淳和
院　承和元年八月遷冷然院　天長十四年帝朝冷泉
院　嘉祥三五月同　仁寿三年二月梅月幸冷泉院覧
櫻花　天暦三年九月廿八日　陽成院以冷泉院献奉
朱雀院　八年三月十一日改冷然院為冷泉院
然れはすなはちゆかりありし御所にて年ふるく
秘　二條院のほかにいつくにかとくと
冷泉院はまことに二條院のいかにも御所にて系図
とに桐壺帝のかたへなるとなり後の御同し
なりし人御
陽成院の御在所二条院にてかの御年中行
まいりてゆかしくの御所には入て御
業しゃのあとにこそまいりなと申てこそ

一代ハうちつゝきまの世かはりて後さすかに冷泉院
の御事にかはりなくてしてたゝし
ふかき御母后ゝ事なく 御心ひかたき御さま
事ハ御かく悩まし 御心をかしき事なく
并冷泉院の御事はかりさまにて 源氏悉
思ひなりゆかしけれは 御かたよりハかく御代
をはしますにてゐたまへれはしく
春の代まては
然 春まては桐壺ニまかせたまひて
かはりてまし御ひきかへの
然 源氏の御心ひかれなからひとへ御のちし
まゝに御母后にそ
然 一明石中宮の御ひかりならぬしるし年経をよし

后の事 十
源氏のうちにハ后ありかたきまてつゝく事なし
たゝ 冷泉院御代 源氏のさかりつゝきける事
おほえ御すゑハ春宮の御心さしのよりも有なく見えける
播磨中宮の御事
后 藤壺女院 先帝四宮 桐壺后
秋好中宮 前坊女 冷泉院后
明石姫君 源氏女 今上后
さし 源氏のうち后たちてまたはなとはしへて 冷泉院
桂壺ニ 姉にてまゐらせ 源氏のハ 冷泉院へ
今上女御にて 前源氏の御せんとも 前坊后
前坊ありさま
藤壺 秋好 明石中宮 皆源氏の御かはりにて
源氏のうちかく

の御芽ひりつくらんお祝ひの　松　秋稿し
冷泉流の　おくらつて
ゆくすへまし。　かくれさまへ
弁　秋稿のふり御家のくし流ひらうたくれ
おりうくかなとし
松　思すく〳〵、なるかはれてをれ候し
流のうりて　松　冷泉流く
弁　冷泉流のこの書流く中年かきてしく
指導もの事まく
みうるの中にとしめて　松　女二元て　弁　流
松　女三ハと上の持て
弁　みつしハ今上て
大ってのなすも　松　うれて大切かし流く

徳又勢

るいのうへのや〳〵おかし
松　さかへしまておの上かしはもしひらかけし
ゆ中いくさかいふ　御会その中し
とさかりのとはさきへてゆしひかくく
弁　しまうのの上御くしまさて
松　ひらそう流てゆくハしさまへとうかう
ありかくおこりしてもしくらく
ゆ流しくさなのん中かく
あらすくつくれ　松　御の羽
こふうゝ婦つさいきまかれて
御も此事家儀とし
ぞ　御中ですさくくしも
只御かんてさてハ　さくしくせさんね

いとゝきしすゝしく
わか世なりつゝ人々　入りゆきたるさましく
あさましく月日もありしこの人さま給へしらん
身をかしらく
御ありさまの事ともつ人は　御心安からぬ
まかりしものつくしくも年より御のさほけ
うけつく
女御の気まし　あそひ給すゝしものけしきや
松　わし中宮けしき　みかのさは実母ありし
うきつるさし
わすらかさきの　明石て
すくいさきれ　明石上の　ともくあそて
もとにおれなしきつし

ふ気も　あしかまの母し　わかきみの女房さる
わかさへうしひくしらく
さゆく　月おもしらきをくるゝ御く
松杉有奥近色あかつく
本ノ古ニ有今此義
松　竹くりして　きえ文字入事未　御心ありさま　なニヽ
表衣　きえしてゐきたれ　えましてさら
月につきしてもく　云事し月日すかりくさくく哉
みしうるし
とかくしもつれらく

長保五年九月九日御堂関白（于時左府）随身室家参
石清水并住吉給東遊神楽等有之
今案賢氏君相具臺上参詣住吉可准之
年ての事れのこゝろにかゝりのみ世のいふり

女わしへ紀を毎◇てし神楽なし
かゝる世を末の世に来まゝのいつかは
なりつゝ分かれつゝなくひかりて人
秘 てふ國母ひとつしてはなれゆつゝつ
事もなし
さくらくちくしも
秘 光堂の御ならし　紀女の紀かなし
紀神の紀いとも　紀女ほなもいさ紀神も
御文をつとまかしこまかく　人ゆる子しゆかゐ
給の給ふことまして
あられまもかくはかなくし　来くしくまゐらり
らりもひらくし事のなくらいせもみゆれ恋を
すらくらてな事なるは給はし

ちらしつりそのかりかわりはつしあめ世の
わこかし人
秘 ふ黄葉紀の御かしも
祝 若葉上り色人にはの御ものは世にまたと
花 交野大領弥益女高藤公密通生女子為承香
殿女御生延喜帝
ひのくしいそこのんとてはつくしうまれ
秘 あし人の紀らはかくみるまゝてうてて 女
まつてひかなさへしかつし
秘 御子ゝかあしつくはとかつるの紀紀はを
はくしかちまくゝてしこゝて
花 今御はしかみにをかすみつし給の事
ちくかくてもくしきつゝ見　内大臣の例にも高

ゑんとうあるなり　私称也
大臣てうところ　太政官八編集して今一人也
なきにいたる内上官の如し
まじく[illegible]をもつてのとし
秘　[illegible]なりとそいふ
と　生徒十人　陰陽生[illegible]して此漏剋の
のとしこい陰陽寮の事ともなく
陰陽寮とは奇人ども十二人四位ある六位なり
四人ども得業生一人あらたる也
[illegible]文[illegible]二十人[illegible]
そうて[illegible]なるめく
天白条[illegible]鐘人陰陽ハ手伝の
官人等也

修理職の試楽調也して[illegible]律令しきに
所一部なり陰陽としての[illegible]司し
事四季　天文道の案人あるし陰陽寮より
内村へくるなり来ものゝ
一部今の世にも八幡陰陽家の陰陽師の
わざが陰陽をもて[illegible]天文ありて加へ
らるゝ事まれなり八宮ゐのものも[illegible]なし
べいじょし
秘　やるゝ天文道の外にいたりて内に
手伝司の人々にし天白鐘人のついしょうあ
手伝司のある人にし
かの修理職の試業ハ手伝司なりてあらたかへなる
お仕八学司也
様田[illegible]陰陽出奇人ども事なとかくし[illegible]

つゞく

一首　隠居ハ所付ありて所付有人ありてハ隠居も

二首めハ有人ハ人ありてこそつらきとも

くいらずか物なり

此かハ隠居ハ又無言同例一節

挨ハつゞりとしく諸説の諸子有之の

ら子ハ年ある也

奇ハ口へハかハ年随同の人多く有

ゝくるの奇にハいよいよ深く

むしてハ又とも皆年清の者へて

又すへてしてつゝとて下

奇ハくるの人格ても又く又へてある

門弟云流

一

内　今上　春夫　初に中又後　院　冷秋

人ミひすいしんてわり　ゟ一二三々り

子副　随身　小舎人童

一挨　とふひハさうしのする年もわりひと年

ゐさるえひとりとて中努分男也

つきて　ソほの身すつてそや

一首　季にて中子ハ人にも又島副ハ

きこゆしのかたよる時ある

女院のさいありく

秋　明ハすまかさ秋かそ同年し　寺一の年し

つきの年かけ明ハ方元気ゆとしく霜のかゝ

おもの也のかゝんかゝくてかゝつて

秋　此年ハわしかきてやゆかゆく桐壺なに

て、こたうしくくにさきにみせてあきさきにまいりけるに
まことにかなふものゝ詞まてにてゝあり
此 女はらからの中に業平をさかりてありく
弁 此のかけるのいしましたかとゝゆるゝ縁り
業平あそんの
新 むかしをとこ母のとかめて高さまさる事に
此のかくしてかくおとゝるゝ
ところのありくさに
此 渡業平すらや 人給 粟 注 副業 作ル事 作者
かくのゝさの家り 宮主のさの女高方し
女はらの家り 羽衣女かし
むかしのあかしのゝ三ッ 此 あはれい流し
弁 田夫業平の事元 西と云ハかく之し

一 むかしをとこ別当のむすめにおもひてありけり
別業之
一 昔の子孫両人よし一し
さうしてことおもしとてしかるへきのことは
かくのことし
古今長哥 かゝるのたのしみやおほくはし
しかるにさかゆへしてさかとこしかるへき
人かくして
伊 伊勢ハ一つにして人のなかうかはしてまいり
さんこうの居集のはたゝ由見きこえ人しな
又のひきなりおもしろくて
しかし月のゝいさかんへきしてといして空上の
ものかなしまへてあき

ちる人世中の人せ
む　春三月や七日あまりはるゝまことの人世中あはれ
みるものかへりかり　松　おもしろく侍りて
たるひく尼君の御まつりは大臣殿の御弟子なり
さかつきはくもとくちかくかりけり
けふ　かは上れるいふしくのゝ事し　以尼君に一瓜
の事りとく
十月(カンナヅキ)かみの十日あまりて
花一月廿日ほと上中下ありけるに也て中の
十日く以前あかりけるにあはれて侍りし　いへり
うこかしむかりけるとも　こゝろ松の下ありくる
かく著りかくしゆかしおもふかな
次に年こゝろ給ふ時の道を人々に高く松ありけり

あつまうらてひわりかきるー
一説云　松の下春のまこと　いはる下上(が)達
ゆし　さくへ八下ともに見なそへ
りんとな君はなの上に以まゝの影のまくらに松なる
こうちゝ
寺　松樹の葉ありて
松ありかみ松かな
寺　春言けふも人あけ給ふ
松　川言ようほかりもしそ　る人てうまれよ
まのかしー
秋と云ハいふとりつゝてにしく　月のまこと
みつ松を以東風にてかかるひ　松ひ
あるりかなて松もしらく　風ありすみ

いつくしくてぞ杖をもつてつとし
あらおもしろの　ゝ　東遊　神楽し
ちはやふるかみのひもしはふり人のうたふる
ことしたく
ゆふ神楽をて舞出しかくぞ柳の袖をかへす
あそ
むかし人神楽し舞を鼓拍子の声の
かくてかゝるみかひとくして
ワキ　むかし神楽をして舞の袖をかへし東遊
りを鉄のことしテ
爰もとは　松　すくしもの
ふかのわりすかゝ行のあしく

詞　山藍　小忌也

花　加茂臨時祭舞人竹文青摺袍蒲萄染下襲地
摺袴合陪従桟欄文青摺袍柳色下襲白表袴合大
口赤紐大口半臂諸司帯等各用付之
松　麻衣の袖にかゝる小忌衣のいつくの藍摺に
ワキ　詞の御神楽を東遊ひの鼓をくわるや
かくしめかゝるかゝへしくてゝ
む　御神楽　挿頭使藤　舞人櫻　陪従
山次
地　すみてしほりひ袖よし舞人袖の袖のゝかへし
むかしかたちかくうかぬ
花ぞ我やさの宿東遊ゆしてもとく
かみにゆんかいしかる
松　まつひいろはて　いかおのの袖にゆるゝ

ゐなしもておかる事なし　行なわ
舞ひてき　いかへいひて　まゐるのあゆみもくく
一曲　いかへきなそゐそくて
りくめてとうて来り
於　かくわかつひとの様のあしけてき舞ひて字
代もいかへかし
わか中のなかにそへのかいてあらはれて
於　とまりそへてうら
舞　ていりと東遊て
此　東遊謌曰先三哥次駿河舞次求子加太於呂
之調子　高麗双調也
長保五年任吉詣於神主立舞御社左府以下上達
部其外殿上人合十人舞

神主立舞相府脱衣之云々
今案こゝへ行幸して事し　神祇の事舞の
神のうへ仰せ参りて後出て上下十人
肩ぬきて　舞事きこえけれは別而し
とゝめ給ひ八出ての舞人を召ひ御
すへ上人の下の給はのとて祿の所
舞人は御祓ありとも申していふ細し
そのうへの御召ひの　此舞事なと
あはれ　唯今このみの事し
秋　舞りすへきたのうち衣え給ひ
すへての下わかえし　なうしのあの
舞御御ついし
りかくうへし　舞一曲みなとしくなす

[illegible]

一勘 肩あく事をいへり 後のこともあしく[illegible]

かくのみにはいふへき称し

秋 うたのそとにおもへりてそあるへし

よみにたるはねまきさるへし 三字非 様にすへし

おなしものをよすへからす 比 かるかゆへ

いふ事をあらはすとも花のみかるかしこき

くは 花のうしろの事 [illegible]

後清暑堂の御かくらの試楽机橋家なとにて

よくるしとこれを[illegible]花をけりけり

にも 花をとくる事は人長の[illegible]人をへ

神楽にも有

あれそのうへ三首の花[illegible]ていとかけて[illegible]

抄 河海の説不用之 一 是歌人のうたの母字

とし 東あつまへし

又 河海の人長としけり 不用之 人長と

神楽には 東遊と云の手の手なり 是は古之

おしまするを例とし 清濁なくてはまもよく

上下の文字を知へし

日本 河海抄 清書 同神楽 根源家の[illegible]

家の付 花のなかにかけしとし 花の一字

抄にかけりかしとしめ 此事にとて東ありとの

また前に花ならし こころえすなるべし

一 歌抄事まてなく

日本 東遊の事 神楽事[illegible]とかく松にかけし

一勘合也

いくさましく　秋　横笛中んはにはのくにれ
この年より　弁　一夜の事の次第し
横笛にはら内しらせ上人給ひし
松　あしあたりのくに入し
すわしかまの詞し
評よん給ちくすこきの評給てすか松り一とこふ
せしかきか給はむくてかはらとし
人わしそれ　法給御申し
かうしにく　明らら保帰京かり
女御の松よねたるもし　内の御ゆくし
せられしきてすい人　松　入給の事し　弁
すの日といかるひとかくさう、も給ひ　きもかまや中納言
弁　わしかえらの事し　御むもこそかんとし

さしかくら尼君まて
松　給ひ物て我身みかみしのかくりらし
すさしたいなしをかくほし
わしてあきみときら候覧の評の右としてみれしそて
松　尼君申らゆにし　大明よ上かるもいう
事おかし用し
弁　尼の御ふし御もまうし
同ふたら事そふそら流の評ぬ御たるく侍るの
とく人々く二の年よりつかはしらしとしそ
事そこまたわしのの御の事かや
一部　侍の若ともしの上あるし
松こ　松るもいひすし　松の人もりして新の二か
かりて御給ひかの御みふ候し　此外に下の家

ふしみやまし

ふるさとのならのみやこ　いそのかみ上のみやこ

ゆめハ人のかたりにもきゝてしらまし

河　君耳唯聞堂上言　君眼不見門外事　白氏文集

すへらきのおほうちやまへ入ハ神のみかけもいとかしこまりつゝ

ぬ　ひさかたの上の哥しらぬかな哥し

さいはひのなかのひさしくえもとしきよ宮居

こはかの中にもしまりのかきましてもと見え

そのみちのくの人

河　譲起家田行変海　花開月令所依春　封雪琴　野相公

今案古人秋栽此詩下叶欤

或人曰野相公の詠ひとつの山こえ見へぬ

すへらきの言の葉をし

未勘出　ヒモロキハ神ノ心ニ━　文時卿哥也　如何

衣　借補移居　寝草依　今此哥

ひもろきハ神のみかけもしらぬひとの言の葉にたてまつ

らむ

今案　此文時の哥ひとつの言の葉とよむへき

しハ古今集なとにもよみおきしことの葉とそ

ひとのこゝろのうへにもしる人もあらはまし

又今はおほしよまむことに出来ぬとより先

何をこそしてこゝろにうけてすゑの世の

歌とそ思ひ給ふ事のうへゆかしからず中

ならひ給ふし此ゆへにつけてうたよみとも

皆古よりゆきけりけれとすゑの世に歌とよむ

みえてなほしおもひのうたのゆゑにかよふ

来し御座しに六ツのちまたにさまよふ哀しさ
つまさすハいかにとしらぬ身のうへにまた濱邊にて
ことよし生来し
み保浦蜑の八 御身持つらむ縁に来たる
りのあれく ことし 二度めぐり 年を重ねて有明の
てりや来りつるハ 人のまた 御身の浪にたゞよひし
く覚ゆるのみ すがの ふれの例でをりて見えし
秋 此方へ寄らせ給へ 今ハ人でなき秋の月の
云ひの方へ秋の月かな こうして御出でもなきにて
て出し 出で玉ハず候
秋の方にかゝる桝にて 早ゝ候 こゝろ 世にたれ人の御気
ふなしは来れし 御心得候 申しつけ候 御事
かくれしのあまたの人ハ 本保の事 心得候ひし 御返しとこそ

中将尼 秋 さもさうらふ御上の女房
中将尼 左候ハゞ御内の女房をつれて出の御跡につれ
あいてこなたへ出ればしら浪八重にたつ白浪の秋の遊びの
秋 さるほどにその沖のなぎさに人よせて
シテ 頼もし
秋 秋の御室の御矢の通りにござれ
入ちる誠に
つれく桝しかば 秋 草紙に
いてこなた 出そうて出来る對面
こととふ事 うとうしきうちに
シテ 秋の御諚 召し候 ひとつ御見ん
秋 秋の本の未 ござ也 さて人の
秋 秋の本の 若き末 さらば行くべき次第

たひすくるこそけりなく
以 神楽西人衣きてもをとて給
人命をかるらしかさ給え
本 神楽あらりて人こそとるへの神まてし
末 神楽あり人勤無よき給へ
庭ひしつ事あるて可るをちまいくし
以 神楽 百千歳平歌
本方 せんさいせんさいせんさいや ちとせのせんさいや
末方 万歳 まんさいまんさいまんさいや よろつ世のまんさいや
庭燎 四声 燎 尸照反 炬也 宂 和名 比尓波 毛詩 有庭燎篇
あちめ一度 おけ
本 以海引きまへ可給へ
くるまのいろくけりなく
四位宗 五位以 六位縁袍 七位五位以定

あはれてゝのをりてをりて 本 識く霞て
以 杉葉を以てくるゝく 納も尽るゝ
此くゝかをく
弁 識〳〵霞くゝかし
一本とゝしく識く自
末 杉の人下事ゝ事くし可
ちゝこゝせら
以 落えとをなく 云所
かれくし 女房 有らのゝ
よろりひ人てかく 以 神楽く
よろのてゝえく 連速 あらひ候べく
ゝ云へゝ向し
ひはくゝしく可くくむつし き車きかゝく

秘 猶仰く おりしつゝき奉りあくし
かの入道の きはは 尼君 明石上なとの常
にそむかしくいけるを
秘 右の事は今の世まて すゝかゝる
事も御ことくなへてあるの事也けるか
つねにや
さし給事なりうちしく八御とのえらしみ
秘 此入道の心いり世にとなしく 事とこそはすゝ
すさましきことはくもまさし御息と論てこそ
世の人りつし給事とも也
秘 いかゝりけんさまつ給か のゆるなき俊足
さらの事とこふしも この身なかりも なにとらう
事もことよう給事とも ことの と 文たる

かゝりけるてこそ此事みなもちて 一級ぬ女房も
やあれましくいけるものかけりつらむ 評
世の中からいわれぬありけり
ともかく世の中の女御にかしこしとはてむ世の中らへ人々さく 秘 世俗也
かしこし代々ともにし
河 長恨哥詩男不封侯女作妃君看女却為門楣
其天下必羨慕如此
かくのちこし
す 世俗のゆかしかるものにこそなれとも事し
ちしかるゝの女御のふ 御心かりて侍を
入道のみつからは 秘 無瑕流の事也 仮名
内の事も 今上の内ゝきりつふしかゝりけるも
いつも給ひてめてたし

まれのり事　秘　新親王事し

以　まれの新事級親し

孟子曰天子適諸侯曰巡狩〻〻者巡所守也諸
朝天子曰述職〻〻者述所職也無非事者春省
耕而補不足秋省斂而助不給

非れくの事　女こし

こう流給し

弁　このりまり

秘　院給くたるの事くしくとくそら

こまてて内つらねし

二品りうりくましくゆうりくまうり

秘　女こ品二品りうりくかくゆくし　弁

む

禄令　一品親王封八百戸位田八十町　二品

六百戸位田六十町　三品四百戸位田五十町

内親王封減半位田減三分

令案二品内親王封三百戸位田二十町也

以たり事く考ちうりれと分し

河　二品親王封百五十戸位田六十町　秘以事也

弁　うちうりの封戸のつい　つまてしり年の事

うりや　一封　戸八民戸也　女戸万戸とくりんハ

民戸をよいをかし人と又おの封戸ともあし

たいかうくりく月日ろ袖くろてまさう中ふ

ゆりおはくり

せるとおの上のそくうくまうして御かくく女こ

とを今ろの内様すく二品おし　いうし　明え上ハ

女院の宣旨めくいりれもし　さへりくとし

いれかたくもきこゆへし
ワらハにてありしころの
松　山のとおもふ侍のいとほしきにまかせてまいらせし
いまはとしつもりて
女　宮きこえたまひて大宮の御かたへまいらせ
たてまつりけるを
松　山のとおもひの心ひとつにつき
なみたのかはき
松　三条殿の御事なるを心にくゝおもひ給ふ
事なりとてうちかなしみ給ふなるへし
ワかき御事ハ御物語ありしをおもひ出す
女　三条殿は山のとおもふかとこそ御覧なし
ひとり侍

御へ参ル人　松　山のとおもふの心の
御身のうへにつらぬ女一人ある
松　わかし中宮の御もとへまいりて見参の
人ならひまいらせて
いとまをこひ
わかきの中宮の御所の御方へ上への所へ
まいりて
又まかりて
侍　典侍　雅光朝臣女
女　女房のまゐりきてまつのわかれをしつゝおもひ
松　大きなる事をきゝて　女
人にもいはれて
御ものかたりにまいりて　典侍その後に
すゝめまいらせて

松 けふしも中あめのはなみつゝ夕暮のみそあはれなる
行きしまゝ無益ありけりし
つきしてはかなきありさまにけるも
御のうちれとして
おかしもの御ゆつりつけて　松 編笠
むしかりけくしきこすら
松 むかしは御あはれにもなきまゝて
斗 玉かつらの姿は御長き方にて口すさひ
うらさめしけくしかしも御のんと
非言かつらそ　松 女ゆえ
かゝる御見入　斗 桐壺
松 中なんりけるゆかしさ人しも中ゆくゑ
さ今こは女三の宮ありて御あはれとらぬ

ありもて
ひめ宮にはいとうとく物さひしく
斗 女三の宮
む 女一の宮の御かた
松 女三の宮いろかうの
来しゆ御みとらひすめる　鳥羽にて
とりかさて　斗 なとか
松 松ゆかしさ中ゆかしなむ心なき
さらかろへとこしひ
松 女三の宮の事し　斗
さしへかさしてれすよ　女花の一つ紙
さすしなへらすれし女子今一もしく
かへ見しなのうへ御ゆへてさしも

わすれゐし一つく　あさなゆふなに一すゝきあら
うきよにつれなき　つゆとおもひしゆる
ゆいてまつく
ちしたらむし
おもひこゝろさまゐてし
秋　さしまし本寺のゆふしほかれまゆうみゐ十
ちりつもちさゆつる　ゆききかへし
わかとゝてくゝてや　秋　ゆふゐたし
ひさしきのみえなり
ゆふくてかりいとかの井のゆふくけ
秋　とのつるゆふゐつさねのくしるら
齋（イモヰ）日本紀　白氏文集十三年来生對山唯将無
事化人間衣時往之間鐘矣一食如何不食閑
韓康伯曰徳曰齋防患曰戒
延喜式云齋称斤膳（斎宮寮）
菅家御集云紙裏生薑称薑種竹籠曰比布記斎
儲
人ろんしいしひ　ゆんふゆ　心細す
たゆみのくゆらもしてかりし
秋　舞くてうきれ人つくり森ゆすなせ
こゝろさまき
ふかきくにもきゆのかりのこひうちのくさゝへ人
夕ゐのきさえ人かりう　忠ゆくもうへ人し
わりきかひかるて
秋　ちりくうちのゆくるこゝや　寺
おほゆのこのさゝ（章）しんとんもさし　業ゆのうし

又採ものとくくきんの曲琴

枕　かきあはせ　手

さりとしらんとかんく

こゑしつくしし年の流くしし月日ゆく　御の空とかくらん哉

こしのゆかしく

清のはまつりしく　赤花の由来し

きくらしやかん　と上の句

たくりの四季りつりくりつきかてわしくき

河　琴之大曲也　春角　夏徴　秋商　冬羽

土用宮也　律寒ニ呂温也分ニ請謂語ニ五音ニ法也

桑邕女訓曰曇姑若令之鼓琴心生坐採琴而

奏若同曲石則捨琴与封曰其曲小曲五終則止琴

有ニ大曲中曲小曲也　出太平御覧

尚書云声依詠律和声　声謂五音宮商角徴羽也律

也主意依声　謂六律六呂十二月之音気

律以和楽也

そくのこしゑめとりけり

枕　其馬流師曠とひけり

花　楽書云師文之変易寒暑孫登之感動風雷之

琴書云師曠晋楽官也上於琴能易寒暑召爪雷為

晋平公鼓之感玄鶴二人下舞

ひそしれくれかくの　かとこのさしくれかくし曲あと

ゆかんとる曲も

以由按押也　手仕也

枕　由ハゆるしあんとんかハとすし

女御衣　枕　明ころわたく

みこもりたまふとはかみわざのはじめよりさとへ出給ふ懐妊
廿 有るは女御更衣なともみなかくのことし
給ふなり
せ月のはしめよりけかれの事をいむゆへなり
河 宮女懐妊者散斎之前退出有月事者祭日以
前退宿廬不得上殿其三月九月潔斎預前退出宮
外 物忌令
十一日 このひはしめてかくれのつとめあり
同 十二月十一日神今食の事
同 十一月 中の 一日 十一日より十一日
神今食 此女の日 まいらぬなり
廿十一月 神事の月にて 同月中は人ゐ
廿 十一月 此 神事 十一日 まて

神今食ハ一段の神事にてあり さう にて 神 事也
せり 十二月十一日 六月十一日 にあり
ましくして神事につとむ
同 わし女御のこと
冬のまつりのあひたの神事なり
同 様 事 なり こと 御しきりにおこなはるゝ月
なり
同 かくのことくなかれいふてふ事 いつ
多く 許 されす
せ さるもの月 御 神の事 しるへき
とかくいふかく
同 いつの 事 まいらしくて 神 のつり
きくしかは

よしつねは　朱雀の千年　深山千と九

流るる哉

松　朱雀の花の咲之雨にしくしくしつつ行く

女　内にもまさり深き会ひしらの深の

さりとて行くとし行くて

二月十日（キサラキトヲカアマリ）　二月十日余りまして深の[illegible]

日の[illegible]

まさりつつ　[illegible]　せきと行く女こ

[illegible]

こりとしつる　華　談絶や

女（シンナカク）[illegible]さしらんこさん　女さあて識出て

其女深りて下化をつ行くまのくくき

お女の[illegible]

河　左傳哀公十一年鄭人賂晋侯以女楽晋侯以

楽之半賜魏絳

史記云孔子為政斉人懼黎鉏乃選斉国中女楽好音八十人令奏綵竹

[illegible]今の物の上ましても

松　女の物の上ましてもちらくさく

深の年代の事にわかれて

い（とく）ふくとりしき

松　深合[illegible]

わりしとや

みなまつのくにうつしつれ

松　其代の[illegible]の花をまきて　深宮

かり事のとくまつく

きんつくこ申しく
男 かく八女二三ちかりてつるくまこ人たちのかはりて
らうえみるく 女 女ふたり
廿一二ちかり とかう一かへし給ひ口をかり
年ころみてうつこゝは八ゐすかきかはけ
給ひもりて ありこそすけく 朱しみて一女こ
わえしく見てこそすゝめ幸し
まかあらかりしつて 給ひ兼房の代句を
まかすをかゝはりりいてみく
正月九日ちからかくりわかく
むかすかいは十九日こ外すみの月こ下むさて
ゑくつ
月て八かいりそれもうく

男 二月りうかえこし口経かゝしくとうれナ
ちうくるゝく
男 ひとくして人のうひかとしとく
ちんてんりこそしあらこすゝ
女 女三つてあく
男 女三のわしすと方へ坐みにかもゝ経ナ
こうこりとなるゝ強く
男 女三りしあきくてふ瑞くよるてて
わみてきうう了まこさかへ（ヨクリ）
男 いくみの上のわくし
むかし ゝそしとものこ章わてわらゆうき
りハきゝり 紅やしうかハ弟ゆらく
わいうり 男 ひうしるて

女御のさかへく　注　わらし　たまへれし

注　あをいろとこそ　あやし

訶　あをじ　天云五位装束也青衫事也云々

死欠　青碗（磁色）是ハ茶碗ノ名也其色ニ似タル物也垂ニ襖子

青磁言下下二百十一をみべし

延喜三年正月十四日踏哥御記云哥頭給綿襖舞人

并人等給襖子云々

私云襖子ハアヲチドト云物ノ事也如何

すゑつきなるかひのさま　注　正月なれは

一部　唐綺等の衣冠をかさぬ

ひとへなるへきをもとめてかさね

注　御装束をさしはさみ　あつかしき

かきよせし

注　あけぼの芙蓉の青流なるの音

并　打（ウチ）ばなめ（ナトイ）侍りけり　又河流

くらがりと

いか装束くはせてなしけるおほしめす

そのとく有いとしきは装束し

そのゆふし　注　中々にし

ありけり　注　帰つく青いかる

注　あはれはうちかへし青州を流書ある青はなれ

向いて有る

并　青州一声のあはれ、かしなこへ　へて

青波下の土へつれきかしまて　土なつへは

神まゐらむといひしてかるし

一流　給まてそはれの御所なほ中なり　下仕（シモヅカヘ）ハ

さるほとに申すれハこゝに [illegible]
清水へまいりてまいれ 女御へ
たゝいまの仰のことく 後の見え
御前の事にて 帰らせて 二人打
又ゆくへも見えし 御かへし 帰す
よく〳〵女房のとく にての人 [illegible]
たゝ此の内に [illegible]
又帰らせ申す とても見えても
一し
女 [illegible] 清水の御もとへ
こんなことから [illegible] 付袋
みかへしみて みれ
女 [illegible]

女 女房こそ [illegible]
一 [illegible]
見えとして [illegible]
あし [illegible] 御身ハ
[illegible]
わかとして [illegible]
わか [illegible]
ことく [illegible] 今 [illegible]
天 [illegible]
まかりの [illegible]
女 [illegible]
一 [illegible] 今 [illegible]
さらく [illegible]

我ありハこゝ神もつるハこゝぬくさ　今すりよい
一部まのうち[illegible]もしらて見　こまもし
すくれたく
出ま[illegible]子　[illegible]利
かまのしらくく
廾　用書りてのまゝもしいて
松　ありしの[illegible]の宮
松　あまりうちのまて[illegible]の[illegible]
ます　さてく[illegible]て[illegible]　ま[illegible]の宮
松　[illegible]の[illegible]富　岩作[illegible]
百合[illegible]（つお
く[illegible]諸ハつまれつく
以　まの[illegible]風のさこふし　ゑくつのかそ[illegible]

ましの[illegible]ハ廾す
ねしのあ[illegible]の　廾　[illegible]中ハ云て
ゆまの[illegible]のすねさし[illegible]しいて
時の笙ハ篤ト[illegible]すりしいてあく
御まて　廾
うくしきせつきて　松　時の羽
らかし二俳らく　松　夕暮し
とうらりてて[illegible]りくらのとさそし
以　黄鐘　笙調子絃て　双調以之　高麗
盤渉調　荒九高麗也
い　夜の作さ神作ハ云もく
調あの三の色とらかしし　一越調之　一乃
作そとらの[illegible]とこつくり[illegible]　[illegible]

シテ 宮も藁屋も〳〵 浮身何処未定
打つきぬ身なりけりハ 地 タ音ニ八ミえしを シテ
さらりきつの光りし ツレ タ詞
さしあり手のひとし 地 御身の御
らわれしよりの御ありさま 地 出家し
つまをしひとる下りし
ツレ まことにとかくかくなく御身を
つれさせ給ひの(らえ)てし 地 よも聲たてまい
シテ 前ゆいみても御すまし
ツレ からうり八上芦のをて
哉とり給ひ聲にも 音とき(えし)ましてし八
こし給ひてまかつ

ゆふのかけり人のたのみ藤くハついに手給ひもえ
地 ものひ方くうり
シテ 思ふとものひまくへてくは申まて
とうしとう〳〵 地 タ詞して
すりて身つ ツレ つれなきかいて
月りうとすらの山 シテ かの君の光
ツレ 木々かけの夜のこゝにて月のさそへし
とみつて
松 月の出してをかくハこゝてうしたる
頭の月のためとりかかりそしいてへ 上音
言ふ来ぬ山のちて
其の思ひ
地 タ音にかけのとまりかたし

廿　廿三段
二月中の十日ころの空のくもり あさう袖
うへなとしろく鶯のこゑ風もなくかすみて
河　白雪花繁空撲地　綠絲條弱不勝鶯　白氏文集
室きよかりの春にことさらめくゆかしき
なまめかしく二月ころの花の空のあけほの
しくらう　具平親王　鶯のこゑやかに
花街の人めく柳のほともゆかし
了　綠絲條弱―　引此詩
春のころのうら　廿　引詩すりかへし
てうしかうな　廿　懐紙のとなし
侍りけるの所とかく　廿　かしはかくなとさうし
けしきは生てはかりて　猶底鶯の声のをかしく都か

こゝろにくきもの
こゝろくゝたくさまなりけるしよろしう
内の御桜さくらのまさりてあさめりはかなしと草木も
柳のいとかしく　松不及奇
松にそのあたりの花さくころ　楊貴妃牡丹
ゆかしさら亭前の花をいへるかは牡丹のこと
秋の月の花かいへるかは雪の事　さまして
むかしの事をいふの立てゝ　くりのすゝく
春のうちすゝみ　廿
うちなるもの　かくしなきすゝ
猶　世の中のあはれ
おもふ
猶　かしこきの言紙引　しもてなしてくくり

新 絹いさよふ風の
まはりのゝく　才 西御門ゆかしく
こゝろも半あらし
ところさらに法性寺くらし
松 前り詠くしこゝろさふみやこ
いつかふかうしなし
三日まゝいのちかへるとすの
以 橋をこへて見えしそのかみ人 橋守しるへし
吉む まし吾の本
きりかゝ侍る御のふかくし宮の人の松のきはに
松 橋人こゝろありかなく ゆかりもなくいつまて
こりかけ二かさしおきてゆかしくのさゝへ覧し
新 河むかふ川浮不知命し

こひかまへのこゝろかなし　松 世をのかれ
かそへ　才
のこりのまつら
世に夕かりの人舟く
深くこゝろもく　松 春花流く　才
人舟のかきりそこゝにゆくへきまくし　以 縁し
あかりのゆめさゆゑ夕かりのをゝへく人なか
まつしく舟りうつゆくくるまへさりして
こかうこく　松 ひくこまのこゝろし　才
あかくかり行ゆく
松 夕かりの哀ゆゑく身あはれゆかりへ
ゆかしまつの月をうつるさしいて
松 十月のなく　才

河　春宵一刻直千金花有清香月有陰哥管楼臺
声細々鞦韆
春の夜の月夜よ　女　似たる物なく
松　さやけき月夜なれど　しかもうらゝかにて春の
綠くもあらあれと　松の表もかすみわたりて
ゆふへ
女　うちかすみたる月のかけの花なかめやるもゆかし
松　けにかすみわたりける月のかけのみおもふことゝもなく　女　すみ
松　かすみの岸に秋の月　夕暮の空
もとのつゆを見て　松　松の木にかゝる
春の花の色よくしれ
女　松のすゑ露になれし月の春の夜をかそへ
ことなき事にて

松　花の色はすゝむ春のはなかゝりて
夕あらし吹く月の影をかはらすして
女　いつも花の見えはなれて
河　女感陽気春思男々感陰気秋思女　毛詩
松　ゆきの弱し
いつもの色をそへて
いつしも人のうつろふ色をかへて
女　御意のやうにてまことに
松　きくの花のゆふへの色よく
松　けにしらしいひもあれはるかに
いつとてもいつはりなき人
松　世のことのはの
春をかさねてまつりの
つゆかかる

むかしのもこしにもかくのことくつたへけるはいつ
かりのりしくらう

河曲呂八音の調律なり秋の声なりと
平調律呂なり律なり盤渉なり呂なり信ゆかり
あらはしまた縁なりありは律呂よしとく律に
いかりすよし
盤渉世にありの中にはしるなり呂律にして盤渉と
同じはなれてく唐りは律呂なり盤渉はに
すること
またつたへはものの調の声なりとは盤渉まことに
まり保安のわたりて
つたへ申すわたりく河原申つりしつたへ
はものの調律しける河曲呂律は呂の方

よく呂律をつたへつゝまゐらするなり
一 春 催馬楽にハ呂律とて侍り
つね平調の盤渉の調 盤渉も呂律にあり盤渉を
りうの来たりて催馬楽とこそなかりしよし
一 夏 かりハ律呂にて云ハ盤渉なりとする
一 文明唐子四番にて
一 春 一帖云々千首下 無葉 如此
いつはりなき 如 春秋のいとくちくる
ゆのくつきつゝ
とのこゝろをわれ
この人しるまゝなれとつゝとへつゝよまる
まれにしよかまへしとき

女 ありや宿へきてさらいへら御兄さんにいつ
さへしも　　　七夜の女中し
宿のわけを女中から
ましてつくまゐりて
男 女中をさとしとらけしひつくしていふもとゝ
わしハあまりましくさまおはりてしもてく
しをみてちとも
おかしみのこくあつきとってある事まへこゝの
神のくわりくまいらず下さりそれまでのおもひし
私 此女つれ夢ほり語りとうとうまつまるし
さ様ハあらくまり宿の事を申しあげおきつ
宿のりありて
男 宿にの宿のうちと神のくへてや下さりて

私 其御もえたいてもの宿おゐ神のくくさまき
宿の〳〵宿ハもらいり 此いひくくのう覚え
なるおもとしおなる事し神のくへきさく宿なら
下さる其のら来と事 内裏の事し
神のこくても此おりひとおあるりなおひとも
釜地のあかひて其のくさあくく一行くて
りえてかおりくとしあしてし七夜の女中へ
持参あつしもせ宿の夕おもちてのさまへこと
とくとみる
とわ女人とらひとへて
私 夕音もまして其りひし往来数々しくいふ
つるしおり
おもとけてかし　夕音 ひさ明けての人ほく

切なきしるしとやらんにてもあるかとおもひしへ分けし

シテ 上代（ホリテノヨ 二字作ル）

かくしてのる　上代

ツレ ひしつ事ともあらしなかとし

シテ 上代（ホリテノ句） 夕音父昇下しの詞

まりうるはしうかれ

桐葉 琵琶琴とつ世りてうれしね人有れとし

わきしものゝおもひしひと

ひとしかりける出あさひとのこしへ人くるる

手向しけるあらしなくし

けふかりく　唱舞く

わかれの松にし　ツレ 緑は大くにし　シテ

なくなひしへる

シテ 声はれてわかりかしへ調へ合てくし

きりかわれし

あ一つしひさ上つ事のことはむとしおし

中をしひとしわかれむし

しかしひへとうひしく

さひくしさ　ツレ 宮はおゑあつて

シテ 蝉の音にし　蝉の羽

あつう侍り　ツレ 蝉の羽しもしひかし

まれそしふあるのでしも（我 取合）なつまてあしひる

蝉もうきまつて

ひつしもあひかりくちいかつてき

ツレ わしの上のひくはほ家に入りてあそし

明日は蝉の身のまるあしけし声はもくそみまさし

なかりし
かたへの一かなしく
弁　大井の花かるの事こし
松　おしまも雅そのから大井の里にてやすし
むなく
秋　羽やゆく　はてしめて御ふく　弁りて
きんかしこらり
羽んを上のびこの事しても　みりのつかの御の
わるこの世すりあてまじかとしれ
まくらし京洋すもし御くなりし　花く
り称まくくせつく
よる何の筆にらくくなり
弁　世の中が哀てまりて

松　沈のおわりしてくまりて　此事がまかりして奥
わくらりあくつくて
あはれ持ちてし御をすり事ハあれしと
かくしひん事ハ　筆とにかくかかしひえん事もうれて
きそりつつくくの
松　こし師るつま師の花すわたし
弁　当世すくまれきしてし　さわいすし
まとかくしえこれく　えつつひとそく
かくくつり　此巧　浩洽
らか中しく
松　不顧もてしまつかく　行まかくかしれく　八陰立て
よくらかかしてあつつくかくし
すくれとし
はたりんかはしらつつく

河　白虎通琴者禁止於邪気以正人心也

文選云賸三奏而神物下降阿琴徳之深也馬融琴
賦 私勘

文選琴賦 嵆康

馬融作箏賦作賦無此文若他賦之文先猶可勘之　無此文

素然私曰此勘注不知誰人所作

松　ひく人指先をならつゝうちこそし

ことの音に　私　此事あるへし

天地とよむへし

私　楽書云琴動天地感鬼神

私　河海抄にハ琴をしるして天地をうこかすと　侍なり

つかふ

哥　天つかみをかむへし　礼　楽通鬼神

まつ河の松の音にかよふらしひさく

松　琴の音に峰の松風かよふらしいつれのをより

哥　琴の音に峰の松風かよふらし峰の松風

くもゐに洞まてかよふらし

ちしらへそめけん

松　琴の音に峰のうちにかよふらし

まつのひゝき

こゝろありて[illegible]つゝ[illegible]

私　波羅門僧正始渡本朝云々

但先衆天皇文武天皇百済琴変

松　ひかれ[illegible]くる

哥　ひかれぬ[illegible]ゆかり

ありくに[illegible]ちよのかりし　ひかれぬ[illegible]

還宮律のことく時折内こしのまゝし
ことにつかひこしこゝろさしあるこゝろ世々
ともかなふ

訶禮記云天地之和又曰移風易俗元下皆寧（言楽）
（禰郎正人 和陰陽）
漢書礼楽志云象天地而制礼楽所以和陰陽通神
明立人倫（師古曰 倫理也）
又曰孔子曰安上治民莫善於礼移風易俗莫善於
楽（師古曰此孝経 載孔子之言）
文選琴賦云至人攄思制為雅琴
大周正楽云賀鶚者人也常夜弾琴見神舞歎
曲
文選嘯賦（成子公 安名條）曰奏徴則陰冬凞蒸駭羽則厳霜
夏凋動商則秋霖春降奏角則谷風鳴條　註　翰云凞
美也徴夏音也故冬奏此声則炎烝至羽冬音也夏
駭此声感厳霜至商秋音也春動此声則秋霖下（降）角
角春音也秋奏此声感温風鳴條也谷風則春風也
皆音律至妙感應有如此者
善曰列子曰鄭師文学於師襄〻〻曰子之琴何如
師文曰請嘗試之於是當春而叩商絃以召南呂涼
風忽至草木成実及秋而叩角絃以激夾鍾温風徐
廻草木発栄當夏而叩羽絃以召黄鍾霜雪交下川
池暴冱及冬而叩徴絃以激蕤賓陽光熾烈堅氷立
散
師襄曰雖師曠之清角鄒衍之吹律無以加之
張堪曰商金音属冬（○有誤字乎）黄鍾土用律徴火音蕤賓五月

箋云礼記云喜歌也　声類云喜悦字

しらくゆくへもみえずしげりつゝすみてはゝき

ぱりやちらすいへなれむかしとなのよくすゝきにしか
おほつのくさのなかのくさのこゝろつれなるかほりなくしらぬにはた

つりはへりかならみえずむかしつゝけふこそまたなく

まつにむかしはまた

みゆるにもあらずかはりたえにけるかもこゆる

ちぎりもかはらじとおもひしかひもなくいまはかたなし

なかなかにけふとかひつるちかひつゝこゝろにもあらでまた

いかにせむかはらぬまゝにおもひなすべくしもなし

おもひかはるのかなし

以琴書云堯大徳堯降感天神降聴儀斯言和之

至也故堯制神人暢

礼記云史礼楽通乎鬼神

蘼蕪香散楚江頭湘竹鴻渡不収莫地悲絲弄離怨

夜深簾外鬼神愁　聴琴　永頎

そらにしくすむかへしにしくなみ

みやまのまつのかぜのをとをきかば

のまたよしまにかたるなこゝろはへとなるかほ

とこしなへにまもる ながくも

かはれにしもまたはなかりきはしもみえて

こゝろのかはりにしもとてまたひと

詞　衆器之中琴能最優歟　以出離

世中りいてしかはれと

しりしこ陀

すかたかはへてとかく

かくからのゆく　えたくるのかへりしときか

ことのくく

ありていにしへよりひきつたへてきたる也　もとゆく

河　日本紀見在書目大

藤原佐世撰

楽家 三十三ア 二百巻　琴経 一巻 蔡伯喈撰　楽書 四巻

琴操 三巻 晋廣陵相孔衍撰　琴法 一巻 楮助叅選　琴録 一巻

琴徳譜 五巻　雑琴譜 百二十巻　琴用手法 一巻

弾琴手法 一巻　雑琴手勢法 一巻　阮咸譜 一巻

師とすへきもなく

并 上をよりかくさる事

以仏智をもて師範としあるひは祖師をもて師とし

後の人をまなふ事も　要なきもとくりかへすへき事

ありつりてのへつりいあるへしつへし　以上古人未定

また伝へしといふ事いつくも見えす

以伝来まるをいはんや　菩薩の所作なるをや

ことさらにして

ふ行するといふことよりいつはりあるへし

私 又音の桐はまさる事なりといへり

并 又書にけんによる事をよくわきまへて行へし

此ところの

私 わしのかくのこの條にして

かはるもの　私 かくもすかの調し

これとそのうちにしたかひ　以今まなひ

私 得たり まつてしなへて

并 此後ある得たるまつてこなかれ 草かへて

さらにおもかけもなき事に

弁 明石の女御の御こと上手なりとありしかは

三宮の御こと和琴は御所にまかりしとく

うつほ楼上　　維摩の業　　葛城 呂

河 うつほの物語の楼のうへのこと也

なるへし　二段　是の手なりたてまつる

らむ事にてやなとてしかは　三段　たうしたり

たりしをさうなくやまいてうつりしんやうなく

とゝまらぬ

弁 葛城呂 呂にも律にもある調子也

なそへつゝ　弁 ゆきこそのゝのゆへ

つくりてんかし　弁 秘說

秘 河 輪手 輪說也　秘說 修行下秘く

こそはなりかたきものとなりぬ

弁 呂にも律にもある

秘 葛城の呂律のかはりあひ

河 将律調 有琵琶自呂成律特澤之

きんこうのことく　秘 五ヶ條のことくにて

河 琴五ヶ條 搔手 片垂 水字瓶 蒼海波

鷹鳩調

一說胡笳吹　白氏六帖第十八云 笳者胡人

巻蘆葉以吹之以（衍字歟）作樂也　胡曰笳 播為琴曲（爪ニ）

しかすかに 御の字 ゆかりに云事

このうちなりあかしてさてのみそてなとならはしの之

しあそてなる

弁 かうて 是河海 ゆかりのなを

わかりやうとおもいやりくてくさい

へるめ万秋五六帖かきならし御ふえのねかはりかはりめ
御ゆかしき
かいつくろひ弁候しに事姿ゝく　禅閤仰に事ゝく門ち
今案御遊盤渉調有先雖无可勘無其儀者万秋
楽説不審箇調中有五六破等否字
まれしらぬ好りつゝて
弁　ひとつきまゝたかりけるとし事に申上て調
こゝろ心もひしきもろくはかりそくてつ
いとめてたく　少将の御のまいし経経
ゆるしてのおの　弁　七八かりあらもていのち
ひとゝ見れたてゝとしも
ときはすゝしあらすゝしかりゆみのみかき
わすれぬ耳かくゝ数のえいかむと御のねく

つゐてつらかりけるゝさなくなくてたのみけれは
そらの花ゆくさえふかくまゝしうつゝし　いへる御わかれのえて
弁　あまつ人ゆくかえて御めて
もゝしきの光かりしにさのそこもと
弁　久方の月の名めて　あるまして宗上人事　秘
三好のう方から　少　少将こゑ
あまりやせぬしかとて　御のそくもれくなく
まつ詞
三好のれいしまめ九帳のうつくしうゆえあ
少　少将こゑより御めありまいらせ御して　弁
いつあまこ内なえ　言兼花
ゆきつらくさまつなき花ゆかしく　又吾太郎平基
みるこ花紙としてゆ

いよ〳〵もうたれ
ゟ 御かどの御かんまし〳〵 綸をたまはりけるとかや
かくて 小弁の大臣 清華の兼備なし 人々
御の寺 菩提心御しゆくかゝり
さてかの人の仏のみぞ 嘉 御ことのゆへとかや
ちかくし
たゞかの人 ゟ 弘法大師
こゝろへたまはん ゟ 守敏 少僧 都かり
清涼殿へ参りたまひぬ
ゟ しかるにその人の御事
む 東寺 しかるにその御ことのか方なり
かくて二人ともに
む 守敏ハ かの人のうちに 御かへし 嘆きて 後

しかし
ゟ しるしもなきのみぞ いつれを人のかたよりも 御しん
まことに
口ばかり ゟ 御心もちふし
二人の御祈りの事ハ ゟ 御わざも
かくて かの事さかし 比叡 ゟ
こゝろの ゟ かのくしのもとにし 思上の御事へ
御なん大蔵の事 言のこして かくぞ人のくる
あはれなり ことなしまん
唯今しの事かなしまこと人へをしく

若菜下之下

今つゝ八坂をいくらう。

寿　御息の流

松　御つゝのうの筆とくらうてまゐくらう

ちゝこをくゐもせしや

うすひらの小おる　湯もみゝく

まゐるとしくわり

松　夕顔に　葉に　深きをしも

よしりのちゝへ

松　御林暮らしふるふの筆をうけて

松　そうきかもんすゝのつりうてゝ中へ

もしそもいつゝひくきまゐる

露のあき　松　せきるかの上へ

右の一帖ハあつかひ
母　いはつゝしみの事しけ　サ
みつきとらひ　后ゐたしめてく　姨捨のをす
ゆかりひかくくそかりし
かおのまのうかりて　御子の母よはしく
ひしきあなこうまけつまとかし
よのくさわきりすくまうけか
姨捨のこよりハ御ゐ也ハあはくし　うき御の月極
母　さ中く　う方とハく
こうゆやハふれ　母　かこそて
ゆくめのうのちくろかし
母　月夕ハしくさみのそ
并　御て　陸奥ゆくしれ五の事しら思うま

うへの事ならハうたのさかへえたる
こゝろにとくにハつくすまつりハひとつきのこと
みなさとかくもとしらへしく
うくまふ母まり　母　ひとつきのとかの詞　サ
ゆくりかへりめてすゑかくさか
ひとさきの年下かへしく　秋のハ三谷たれや
ありしひさしく
ゐくふねつかしさ　年月かへりなり
ふりくうく御かて
さく名つるの　母　さありそしし　并
いうかかりとく　前の御の御上事の
多きりくくとまてもかつくて御しくうつ
りはやくく母まりまくのゆかりてしこそ

せこなのやのおりことのさきて
かくかたまいて　あはいとひめてし侍と侍と
まろ申りん　もまてせこなのとて侍く
ま人つるの世まりいとひすかきてさくと美
りせそいのはしの方まうちすてゝ世にかてもなひつ
とも申わく
ひとしもかをたくゝおかけり
以　卅七や　とし十七　ならふれまかりて
こんくもきとりか
女　こちはつへくん申やくまなししく
とれしも　女　侍の別
おはちへさかきひかのかたりお
せこなのこへけしくのんこしなれていてくすへく

へしかり
かくさゝみて　せこなのゝとせか侍
まゐ人まなほの風んかなる事いつてかうせ
かりく
れこえかひんし　侍のいとひまいつきひ
なたくいあうけて
女　こわのまことをきてのせう美の葉のか
んまつかのまん／ゝとまいつらく
大将かゝてなかな　女　貴上かせし
女　貴上之張か应りゝえてましてて
はまり中くんのか　女　浅はく
みすまのあまふりきのつさし
女　まわのまいしとのまわてかんといひかた

みかく

うかひしを松のつゆ行く　葉上の秋

めしのたけし　不定の紅葉かな

さつしかし　御　哭かあるしの時

中女つきつまさへもしらぬかな

ちつゆに紅葉もこあつるにてある

御　秋かにあるしに

御　書りへもつかつきしかのにあまつるも

中ゆへこく御上京　御　こ衆に御上京

ちゆくかゆつうきれ

ゆつくしくし年しと紀こゆ

人のへて出あく　まもちつゆのつさかく紀の御

うしいつき御しあり　御　ちしくのつきまかせく

秋　御も定一波のつしいあつやかれあるく

ちひつかさ御ゆへしたつ冊ゆありもつき

かつけもよろしく一し

ゆあつひけをるいつしくく

ゆうあつへもあくちつしおくてうあまへのへまて

さくこいうあし

うちをあつあさタうしもつい　新ゆへてもらね

ちゆのゆく紙タうしもとしゆ御きおくてし

いおのゆきあるてつく

ぬ　中もしり御のあしきあぬく

つゆくゆり　まてうゆ上京のゆ録りく

あさく御の川も来れて

中りあ事く中まつき中りあし

松 竹中とめの冷泉流よりも勝りてつらうら宗
事かくれなきにしかつゝ意皆よく
御のまことくさましくし　梅 月世ありとし
それ世りつるも
しれぬとむめのへ
梅 浮世よりそり天下へひらし
とまりしうかさうおなんかうたらん
梅 くらう事ありて世さめしく
さらふのあらのゆうく　薫と中よ床皆かへ
ゆくりうるのくふさ
松 世かねりまてしくふ中よ市のこの
まりあらくまでまゝと信かいかへくか
くるの行くうてしうて

井 とうの竹東と竹しむ竹の事
梅 あうしかうの事くさしいとかりあっし色し
色しのかうか竹さくへそとし
御の美さまれて
松 色くゆまくしうてくへてかへふとかに
井 ゆしくうかまゝろうしかに
ひさくとろとしのか
梅 て中よ市薫とやしかさのへにかうくろうこめ
いかしのらとみそろかなの事ちきゆく
いてまして行こうてうき
梅 皆うのいゆるらしうくつ色ふ　いやとあのうのゆうま
かれて松ゆう
とう内あり色へへかれてへへ

さくらの花御しく　松　御のくく
竹　御酒
松　御の心ざしうれ一しし
くわさき生まれし人を　ひとさかのうく
わしのよはひさしも陽のきしかり　ちよの御ため
ときも文もしてなかのたのしみをまつかり今に至
くくたくしましうたふを御のまへてさかんなりく
はるかかすく
むかし松はさかりうちはさかりいわしかねもらう
梅　花もちとせの上かりとしてうくまふ
よろこびも
松　御の為にわくかりんみちゆくまき
竹　よろずよへいふわくのふかすくこそうとく

かくの事く　松
いよしおさめやめしきまへ　ゆえし　きさらふ
とうとき雑かりしかり　竹
ありいはしらむくたくさんせつ
松　ちくかりこうさひかりもしつけ行ひ
事おこさんなしく　ちとこのへ　御のきしてまて
これりんかく人かり
梅　ちとこみの　きと御く　竹　ちとこみのさ鉄く
今さいよおかして　梅　御の翁
こめてしいん申すそくそれ
御のこなくたさまて
白妙のさかしめうく　白妙のうちくひこゆきかし
うちうれしさまてくく

たくひなき御代のためしにまかせつゝ　宗長
あまく世の夢もしらす　弁　宗上人
世をしのふことはりなきか君いをやつゝて
弁　人の心あちきなくのみかなしむ事
はかなくも思ふにそひてしらく
以　よそにのみなかめしつゝ清をそむきしに
松かり　不知
人のうへしかたこゝろをもちてはか
しらすてことすてゝもかたか
またりつゝ人はれ帰かへしうちそ思ひの
ゆくしらかなくもかし
もみのうちのてま遠すかつ
す　絵りしらかた　方そへ入りの絵

松　小侍従　詞
わすれ草よしやあふことあ
如　とふらしつゝかなりをひとさ我に行てさる事
なかしとし
ひとたく世のゆる花
如　松中を内ひとくもしめくのてかみひてしつゝ
以　花覚のことを思しつゝそ思しく
つまうりさくや　女三宮いとの心いとう
うちまりとひかうぬてもくも
よろつとひきしく　如　かしまく
まひかりさひかりもなく
如　柿本詞　うつりさこの口なそて
わかそつくとうとけく　さなえよの手かへし

かゝりけるにかゝりしところに昇進しけると
大なつとくさうこうかうまことにすゝみてありけるに
とかくしかは
以昇下しこれんなる事一し
ゆるかくれ
女 小侍従ましんまつかさりけれしつめ事の
御年ゆくすく
えいかにとて　内詩　御はん
さらにつゝむまいらすと　小侍従か御
流されけるす　侍のことすゝけると
ゝお柳くは
并小侍従さんちよりかくて性女この上臭
わき事にもなし

ゝまゝく見とり　女 柳本し
そのつきこうしとく　柳本の返ことまいらせ
りきゝうかく
まう柳しかくてまいら　柳本へ小侍従
らうかく
あらしへかくて　せ　こふしかくりて
付き翔月し
ワしかもいしはしかゝの　女 柳本のへ
きゝかゝるとかくさるまいる事しまいらせ
お事まいらせはこれまて　くし
かうり来て宮事からへまいらせ八柳本
かさひくしゝて
御目すゝ御はかりてゝかうくあめとゝく

一 四月中午日於内親王様事 御中 行事 同於 所藤の

御様世の事始り 中午 日し

との時よりまいりて明日女房衆まいりて

重ありて御様より午日より御出始

所様より〳〵まいりての御様より右衛門

元日より〳〵〳〵定日に中の

午日より

上らうハ御くみ

子 地あらひより出る 付へり

於 口八丈よりまいる八ツめしかまへ

御りし

ちりく御所あいて〳〵まいりて

子 女ころより 御こし女くくし

御中将でとくしうまゐらせ

於 梅参見のこひくつし 子

中〳〵の年のひへつかりくの 松中の御よ

子 まいりの事をしてこひよろしくとかく

もおる一つ出るし

さまもたゝれ事あるやハ

於 此行の沙汰く みなかりの年のくく花

まいりてこひうらしくしく

かそくあるをも御く 女こや

松こつまくし つ〳〵

御の松かしおかし 御女のしあし

中〳〵の三つゆり 一 床よりくこく花衣

ごしらへこる

見表 生紗

十　房州ありしと見へたり
あき田しむく時分くて　かやうの人申し
つかしおとすかのさま　もとより女こゝろの袖し
ことかなしけれ　物うしと申し
おほきすらんの御ことしを
まかせ申すかしこきひとの事しらく
ひこうやりこのへく
まく一句ありきのひとそこハ一く八首御し
きこし
御ありもきこしめされかし　物かたりな
氣なしもありかたくあらく
おかしね一おもしろく人のまことをに
物かたりの御そこもあさまはおほえ御ことし

御かへしのこの御ひハいかにかすとなりし
こそかしはかりかし
物　人おほえこひ　をし　女　昔のおもひしを
そこかし
ゆうてけりきこし御わかゆかの
ゆ　深養父　日記
ものおもはく　物　人の御しのこと御し　十
御こおもひて　物　言の御わかのゆかしく
このへのけゆ　女こゝろのつかし
ひかしくかひを　いふよし
きかりもし申かし　ゆかの女こゝろおかく
いひたへくおほし
あさつかひて

又このはしなからんくみ
しかるのちにはゆめさき
とかしは木のもりにちるらし
又もうつくしきまれゆめをあらしてゐてよひ
こしなるつゝみあらし
又あしはすらくはなくしてうつらく
うちまちもかしこはれて月きく
又こひのあはれとてあはれて
はなはいかへのほか宗書ありてもつねば
そひてもあはれかりこひのゆめをかけの
〳〵をりて
そうしもひをはかるまいて
女こゝろ世のことのゆつをつかはゆめみつゆゑく

めくかあし
もしさまの以てし人をしてあれとかあらば　以将徳御紀
ありし
ゆきめしき二東房御あしあしまゐり
准だ
まいさらゆめしもかれ　以睡桃江
坐睡　すことり宗書のこりあし　庭
ありし、ねこ　以娘妊あるく

夢獣懐胎之相

なりし、ねこゝあるまじてすなれ
みてしきありそりてましてが書しけ
りなまつんてもあらいてゆあるものを
こひてな悦びて書きしとあり

かりにすまひつくして見えつゝつきものゝ[illegible]
松　夢中にてうつゝ見えつゝつきものゝ[illegible]
村　しかれとも
二人　夢中にてこゝにありてまつ[illegible]
又さるへくはまたもとわれこなたへ
秋　須磨の浦にて村雨の[illegible]
かなつかのうちの[illegible]　松　行平の中納言
給ひもするといふつゝこそつらん
松　御供　松　女とてこゝ中く
みるのかたみとつくいつくしあつり神をつくさ
次　下官ノ裳（モスソノ）袖手（タヘ）拭涙　神仙寧
松　村雨のしほり[illegible]
いつしか御つてに[illegible]　松つし　八年の秋

さりとてはつらくてすつるわれも
行平の[illegible]　女こその御のいとまも
行のゝく
わりてはしてにけ[illegible]
[illegible]　行平の[illegible]
わりての一[illegible]　給[illegible]
いそは[illegible]
[illegible]中[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
行つれ[illegible]

こしかりつらん　御念かさいて　サ
ともなひけるか　あかしも許容の沙汰なく
ともかくなくていつはりとも思ひ入へく
あらはれて御ゆるされ　かくはかり
こひつゝしせしむなんて　命かきりかしこます
あかしかとのあらはれうるまつりけれはとかく
くやしくくるしき心つく氣もし　御つまあ
かくそしかなしきうき
めしかへす恩つゝしも　御の恩かうも
御のうらみしくしゆるの給ひ　あかしむ
まことにや
とかくしあなたすゝめ　慈悲深くあはれし
御の恩情深かりける中にいて

秋のよしもしも　御　月かけかくせ
（御身）ならひけん世をかけ　明暮の言のみかうる御秘
てんかにかくいくいりあくしくいくるしくし給
申しくるしきつらも
十正徹かたゝかふにし　こはちゝの心地し　て
禅閤いひしかとてもかくんもかし
みちのかひとしとかくかしくるむしくて
こ哥のてはしまうし心まつり　のとこの毛
作歌といひつくしみるを十
筆あそひてひとのしるしもの　ちち
日結悲之日　御外古云多之　一子勧入
あかへりかすみもし
悪やこひいてかりうもし

おもしろくて　こゝろえの事ともありけれは
侍り　然るに後ハいつも事とも覚えのとも
申して又是を一しと申侍り
又正徹流　此しかし末に至りてハ何人か
言葉にて　ありとこそのかくし申つゝ
初心のかたへとも申てありしとも此流の法
候也
了俊云ハ　かうさく門よりしも後ふるくて　ありける也
ありしかともかの家の方にかけつれ
門流也　定家ハ其家流也　此流ハ流にたえたる
うつくしく言葉のあはれなり
此外其ほかにくわしく書きこしてありし　不及不審也
当世　いかにも家ハ　いかにも家にも候へ

いろいろのうたのうちかさねて此後の禅は法くし
まかせて
為家流　うつしの家の方へ申し
又云　てうかかれても心は道の事　正徹の如く
かよひ事かしこくいにしへ様の家にもなかれよし
又　てうかもとは道に見ゆる此人の　作風なり
かひこと門なりける
了俊云　定家かかれた
当田　物とハ左に見えて　初心の作風不審
さて　此ほかにも　しか此こと
みえて初心とも此御事　深く
ましく不審なりけれ
いてうしもとかり　すこし　てうとくまして

柳の立いてゝもすみかりく　かともすみしかく
さらく五方かしうまかと云ても
みとらいてんとすみ付りし道ある女のすくし
すくえりくすりしすみんとその世すもを年く
迄女ニ二女
明くきの方りうち多八御方ん夢成かりとえてまてく
女　前すちゆゑうてすりくらし給と御方の
立くもまつりすまみてくよみてきかなし
ゐてはあなすり
まんし多をうれまて
以　わくらし袖のからまみえしつさこうえ御しの
うすゑくらすみゑ
女　御の手助し　わくらし　袖のくらなを入

りきんのくら有
若女　まひよの羽眼て　ゆうき月て　女　若菜あへし　若女
女見うてもらんて
人よのくそ立らひく
若女　御仕ちゆく　ものくみうくらくゑ入
手向くらく父神しうゑとくりうゑ成一し
うきうかまうくなりり　若女　桜の夢ゆす
そうるんへしき　若女　思給うて
むてらむそてねく
女うくれて　女二女
いく立すき事
若女　平らちのひとみりす所給ゆうす
立御しねすみれもこれを別しく　立御

おほしめく
みこのみやとりあかきまうく　いひ　妃　記日本
伊寿　汜円　女御后あらはあらく
くるしかるへし
これを光仁の主となりて
あるらにもきれに伴てあり　女御なとは
あまたりく叢りあるそ女御はあるとこ
こにほりあかそとおりき　嵯峨の帝
女　同しそこあるき　上陽人女もいへり
うらりまき女しるくやきて
む　二條の家の后たりの女なりて
女　世人としぬ
桜　世の人とよく世あわれる人と乾くる

光仁ゆくありあのすく人あきもくにこれを
いつくもかうきらんもありなし
光孝　光ハ嵯峨りくるあかく
女　光孝　世おかくもろ
せりきらあ
きまるあ人くしらう
ふうしきかくなひも　ふつてこしへく
こかしおりて文女きれしくありものい
ちかれにかくらきかうに人て知し人う後人
重き近きしもり志つしく前子にとりまし
あしいねハみあるくに中たいとさくに人と
おもこえくら
花寿り　御業二一ての后の勤めくいつお志たる
つるへし

さハ御ゆるされ候へ　松　とく〳〵
女　七三年てこそ御つゝしみ申候へ　さらは申候
かくらう三年のつくしくさいてさきへ来て
申候へハつくしく出候しさきへ入候へ
とゝめ申候ハしんてさい木さく也候て候
申まいり候　をもき事あるまし候てまいらせ候
うれしき事に候
さしあたりの事にて候ほとにまいりて候
かまへて申しけれハ
申こそおもひしよくもなく〳〵御いとま申し
かゝる御いたはしき事ともなりけり
松　岩上の御座敷へまいりてさく〳〵　女
さてこそと　申候の方に　岩上の申さるゝ也
さらハやすと御のりつけ候へとて
えしかのうへ書し可被
女　御のんて　せこちの扨れえてしかのかね
扨り申こそう申すり　うらひつとるね申すり
しさまつつらのへく
めくらの申て候とて
女　えしき来まいし御いはこし　いんと岩の
松　岩上のう
ろうしのさ候ひて候て
いうかからし　かくらう
岩殿細かくう申すくいしくまは　ところう
えんとかわうく　ゆくし
さかすむかしのうたにかくれて候
御の女こつの子つへれといふにかなし

ニみくもしおもひてまよひぬる
女ニうつし給ふかし不斗の事をおもふてすけねと
お作ニとく
人の先ハ　大唐の一番し　松
よくかゝれる　忘れまじとも御人ゝ立し
まろうかり　松　雨の中や　女
ゆくらひゆく　物くらハよし葉す　花見て
ゆくゑひもりて
まつ給し　つ　道のはし
女ニ出てかしこれてのか　女　二ニあて
松　落葉ニあて秋かあて二分かれとひ
よしさかつて　ゝ
わつてんてかん給く　松本の御座あて

松本
ゆ中をそつことしめの書けり神の中をせうそしかぬ　よ
松　掃除りの羅紗よけてら
掃あとく給羅紗のひくゝあり　女ニ出の年
とよしりくゝの中まかしくしかねとハ
御衣の事とあひてよろし
人中も出のつきてくあり
まゆり絹くゝまつね　故のつきて女ハ
人中よりおもはなく
女あてゝすゝ御しかと　女ニ出
ニゝ参とかくく　松　落飯ニあて
とー九ハ　松　女ニ出給ひて
松本
りかゝ作り落とかなしいひたゝおりさしきさ　しかえ
松　黄桂の乙とも　女ニ出て落葉ニおハ

又此ゆゑにもよりて落花ハいへり
出す りつらくとハ萬葉二葉ニおもて
うちいへり
又ある説 桂と萬葉の二ツ絃を出して云し
落もとを出かハしる所ハ萬うつしけるにて見
えるにもいりまし給ふ門 年中うつるかひ
しれく
入 并 萬 桂のうつし 落葉しい 二ツの絃よりうつり
是を出ニ二ツを
ゑる絃を
いとわかれし 松 葉代也し
萬 并 并二ツの絃を以ひわたし出二ツの絃云へり
松とうるハいかれし口つうはしく
河の上よしく出るうつるく松りし さしも子右

うつし行くとひうつらう 二萬絃く二つ行かれし
まして云ひわたりしく
ひかくあるの所行りまし へくまして
ましりの説を 并 二萬絃也
いけれくし 以 行云 新葉 并曲也
ましれけん
うるつるうわのこうすゆきかてれ
萬并 是を あるの 渡 行僧 疫出かりす作
を退出かよれ 萬落の所もちりくわりう
うるを種もこりつ退きすれく
ほかくとさいへ絵 ちくとおりてふ
さうともわのゆの
松 萬けりく 法のんへ行こしく作りうわも

うけくるゝ
不動尊のかりそめのちかひにも
河大般若經　定業亦能轉　正報盡者能延六月　故誓
任　不動義軌
金剛手光明灌頂經云　世号不動立印軌後次觀
自身成就尊形状一百由旬内所有難調衛悪神等
持者皆悉能敬懐
秘　定業亦能轉之心也
善無畏三藏之師欲誡弟子為受灌頂善元畏行此　見河論
法悉受灌頂也
手　其後衛延年之事在之
尊寸　能延六月任とあり　然れは　延六月の行
しるしとも如法にて

人の命のつきんとするを其命を一月まても
はくらん月をのへんとやらかひ給ひぬ人の
言はありとも月はかりとも　ら
その日のかとからとかり　然延六月の
はかりの日のかへりとも　いくたひも
とありて守人の　かのかきものとも
尊寸　衛のひとつとも　われさこの守
よりまつりそらし
終てくらへ　衛の無衛の衛切のかへり
然の衛くもとも
まくしくらへ　尊寸藤けし衛を
しかしてまつりさき
尊寸　口称りい金剛衛かくらつくつる調伏

来寺曰　調（テウス）ト云〻

てんしんさまに御なつかしけれは
このときにてましましてもいつもゆめのみさとし
かほしとなん　又さとらせ給ふとそ
いつしからせ御しく
御の命も惜ましくおほしめされて
とてかくいひてなけかせ給ひける
其時西方をなかめさせ給ひつゝ
其ころ御京のきりかくれけれは　かくしとき
宿しくいて
いかにわか代にてんかは
とりいての桃にすみの迹てこそ見てかへ
それしきうくへ命も　御の御事ゆめふくみ

まけくわかうきめのみたく
きしひしみてましし御のけの
松　菫にかくて出しこのさきの御
いくましいつはしちしるし事へ　登す
ぬゑもゆしまいて
菫かくて、さますこと事に御のこひくきまし
日文のうのさこ御りそくてさていわく事にし
菫といとしてまおほし
御よりそのんてつ
御の御使の手くすかりりかて御へ詞
きゝる御身の為にかくさん　此誹名
す　手にかくしいて
みつのさしくへ事の　御のんれとさりく

人にえしぬてものへせまいつみとし
ありくしいくかなく
地 のけのき渡し
ワキ 御のやのはやきとあなくとおほ行かむと思ふ 見えて
あしのこ白きともの人くぬし
妹 御のやの方くし 祇女了然 なぬくれとく
弁 地のせの方しとんかしく済氏八千
之とまいつらうし
ちうくらちてうきとしひつつしん
こ申と所の袖のとのまかく葉もれしまのけ
ちらくつら事を
地 いちらしとおけ行め
女 済のきのいてらしとも

中天の事ましも
女 御済のいつて 弁 杖付し
あらしりかりかつまとも
弁 其本所済り仏のとくのま申し 按
こかくすしも
弁 子の事給思とかくし 内無所のん
行くりつゝしとありひきこえし三五夜人
河 訛ニラ 按 子うすすい所済り うとう
かまお家かのちくへのとの世をもとやま
わたくし
いかくの世り人くし杖とし
出 其本り家給云ひ往くましぬうし
所ほの思はり佳のつくさとし

ふしきつかまつる
松 某祈り忠上へつよくまいり申し 井
つよくいのり候へ なつかし
ふしきなる事のかなしみしさるにいかにしてもよろしく候
そこのまゆかりの前ゆへ
皆寄り申して御事
かしこまつて申しつくる 井 いつか
者ともいたし
すまひ世の法の事申しつくり事もいひて おく
たうとくして ましはしてちよきやうなるの人
いつまでもゆかりなるへく
うつくしきかりよくさうかのさと
まつく衣をいかに
井 いかにいかにも思ひもよらぬことなれ共 忠も
松 某聖ほとなりのこゝろにて
広さのいのちのかたち有しと申し候 いつまでも 絵
給ふめりつかひ給ふ折ふしつらさ御かへりて
いかに大下さてにこそなりけり そのさとも
松 世の中は唯かりいつかいそかし こと
くらきそのに広さかりつかひて
いくつにも身を
井 某がいのりまします
井 とても
松 いのりをいたし 唯 様御事をつかまつれ
はしめてゆかりまいらせ候
ゆかりつかし
松 忠にて

松　御をゝかりつゝまくてしもゝ并よゝら
しかう
竹　仏神のまもりく　御はかす
松　御をゝ中すつゝたれさしきまえ
きこしてかしき　此人とし思て
もしくおほしゝ　めのけまかへ合せ
こゝゐくまちんも
こ　かうこうしとゝかり
す　神もゐへ霊神の　おそらく菩薩なと
竹　修行なしかうて　とおもひをし
ゝまへし　此ちへたゝうつゝそかんとし
修行のゆふ中しうてむかすし
梅　おほえりそてゝ

花　大般若御讀経　焼損邪気之由稲荷明神告貞崇法師給焉（見延長八年李部王記）
箋云　死冥者追福而令得脱之法力也其冥乃可為善事不審　頭方如此死霊ノ心ニハ相違如何
ゆかゐゆみつく　はゝ帰らし
所かみりはり中しに成りし
松　所かゝ経はかすゆゝわり　そ経さくもし
竹　大徳の　ゆしり所流ハ経りてなすも
かうつらいまをまし　ひさいと此流ゝハ経
御わたくわかゝてゆしく毎朔の以をさり
うゐそえまつた　いかゝ
之一とも　ひとて　いかゝ事かわてさね
うれしくて事経のつゝいわまく

斎宮寮忌語

内七言 延喜式

佛 タチスクミ タチコゾリイ　経 ソメガミ カナカミ キカミ

塔 アララキ　寺 コリタツ コリタチ　僧 カミナガ　尼 ソラ ハス　斎 イモイ カクナシ

墓 香炬 タイ ミツ

なかこそめかみあららきと

えしこめく 以 葦 絵 ゆめのうち

しこつくさしのひわすれしとそのこた

ひしくをりつゝはしらまて

いのちしく 女 生 ものおもふ人にこそ

わかれ 鬼とゝめしこともなし

そのゝかみしめくしさへみらし

えてくさ 歌 葉も高し

千 歳 集 しるへ かねておもひし 日のうし

くさもそして

いまはしのひのさくらにかはらずも

わかれ くものゝ

松 うたかひをしらせ ゆめにもへて

千 ひとつのうちに 心をしもみ ゆめにすら

ありしかなつとくるとて

このうち 以 字 ものをゆくらい 千しものつくる

わすれはつかりそし

万葉 あらきかゆへてもいつくし

曽保零 真名本

まことそほそにゆくしらぬのそほふね

いつはて丹ほふ小舟く

日本紀 赭 ソハ 曽保尓ソし

ゆきはくゆ

以　まよひもりちかそしと申ゆかしく以なる
うつりもとひまさる内し
千　まよふ方に　ちかくなりの人
春ともいしもくれゆくけさ
くちせぬかたゝなく
紫　まよはしてみ
二月の　あれ　松　かくて　千
りんのゆふ侍し　千　おなしの名所し
たまつのとけ　松　同筆　しらくて
ゆたかなるしらの　千　あるの日かけちるみし
くもひあへる　をくみ　つゝきて
松　山をなのそ色　うすとしひ以つて
祇　かし出なく　とひあへるしるし
みかなるまし　かこその　なにはのゆくへ

もみしくのことしてあるひく
かそのる世あり
以　出そいはひし桜をもそくけさゆく
世のなりして　なつき
弁奥入　みちゆく　ちかきかこそ
ちかくしてはしるへし
出ても　松　出さみたる
大中のみち　千　夕あり
いはひしもしてく　松　いはの初　千
さしてしき　ゆのなりしもの
し出思の初
いはかしく秋くてく　松　夕暮の初　千
うらのなきしかれい　かくしはの袖すくる

事ゆへにまいらせしにほとなく宮上り
し給ひてほとなくうせ給ひて
ふたゝひしるしありて 故 院の御すゑにて
おほくくたりの 御の内 室病にて
入けれともえかなはて
女ともまたあつく御ことしきこえん
ひとゝせにはかにうせしとて
そのおほんくらゐかくれ給ひて ゆへ 摂政
に太政の御むすめ 摂政となりて
おほろけならぬ
祥寛 家のあとにはつかしく
みかと 宮上の大将源氏の人中にて在原業平
えし帝の御ゆかりなり

みかと御心よはくおはしましてなり給ひし
御むすめの
后 いつくしくおほしめしけるに 前は
まことにおもひしまゝにて叶はて和歌
これにし
さりともおもふかなしきに 御の御心ならし
黒谷 ハラキ 々たし かならすもえよる 成
なにし
いはおほまし給ひて 后の 藤原の事也
さし人わたすに 宮 昭ある事とて
れい御のくし 御事をはしける
記のとしてもしく
世のなかにもひき をのゝいくなる事し

いふもかりて女のうへに
ある女は業障ふかしとて涅槃経にも
いはれたるとかや

河 所有三千界男子諸煩悩合集為一人女人為業障女人地獄使能断仏種子外面似菩薩内心如夜叉 涅槃経

哥

まことにかくいつわり
ゆめの宮ともしうちゆめもうらゝもの
なにまても中を今のゆめもろし
もろしいまにゆるしまそも
なしかなくてんとて 哥とあそしはて
かはとれる
たくゝかりとゝゝもせ

哥 同 五戒 沙弥戒也不及十戒ラ
五戒龍王経 一日一夜間持三帰五戒人生三十天中所守護
又持五戒人廿五神王被護
亦以清浄心合掌不生他念人者命終時生月摩尼天 経壹
要法文云 五戒者是優婆塞 此云近事男 優婆夷 此云近事女

たゝへつゝりそふもあくまして
哥のまゝつゝゆめのそふもあまて
まりかしこく
哥 なを 滝合て智人て賢人も謂頃をへ
しるくも哥ゆゝなしとも頃はいつまて

いつまでもおもしくて

宮 まことにかなしさ涙をもよほし 御のこと也

めつらしくすごし

おもひまいらせてさへめぐりしかれ

宮 弁 何しても心得あらし こわくし

しんのさまかはらせ給ひ かの御ゆく

ゆめの御ありさま 御気色のみえさせ給ひ

世の中のかはることくに

弁 宮こそ 定めしかるのかなしし

うゐのこゝろかゆ

宮 弁 禁中 あれし 御番代にて御中すゝめ

かくお中となし 此経を

大般若 最勝王経 法華経あし

おくれぬかたかなり 弁 めのおほし

なにかとかくからうあやしく 宮上の人

宮にて御おはしましのこと 御のこと生

しんぞなくもとにまかりし 宮 かなふ也

こひとかしこ御帰りまなる

おもひ仰せつけし

宮 弁 こひくらのありまし

なにことしかへしく 宮 弁 おもくるしき

ところ護りにかけなる御かわし

弁 心すゞ網し 宮上人中にしきと 恭けし

何ゝまかしゆるつて 御のかこつて方へいて

おつかれのなし

旅へ中すゝ此中くらし 松 かこう 京 がり

塩梅く

まじらぬる月より夏つかさて見し　二ヶ所五月まで一し

柳ある女三ヶりあつかうて見し

又のおもふ八つのかゝく

夢の中より見えはへり

松の　しの月女とあかりみてよろしし　書き一し　十

若草　柳の人ぐ以前の世しらしぬ書も女ぞて

あの人も人生の路の仏中にしらぬ気ていつはく

あしききれう

院もいつかく　院の事し

名柳も人のたましし　若　柳後の事し

しくくしかれ　若　柳月のとかく　松

まししかれ仲をさ給　若　院く

松　院の松にも松くさりかゝくまゝんゆし

のりいつゝもしくてさう　松　塩松のよし

まえも中くる仲人

あのきむかるとも世　蕉　以前の同年の修理とある書記の

書れく

まえもしてめかく　梅　若　塩松御不審

よしるく

流のうくもとく仲人

か　女との塩松く書記つとまるさとしまとし

院の松とさ若年の事もしし書にも　まの不審

しく　分松所しとり

み人中くさまで

義　女房のようし所へ出し御の六条院へ参らし
さしかゝし　女
松　六條院へ御出ましまさは　いかさまなんく京
院の御所へまゐりしその後の事
何ぞ仰く　　内　諷誦　同
女房もて　　松　むかしをおもふて
うけたまはり申
義　露のまゝ　盛衰何となくて　君こそ
お心なくも　御そく
宿　うへのみや中　御ゆるしありてこそ
くしき様し
女ハきらしらて
義　御心をよろこひてましまして
内　修吾　女　小吉

花をまつ扇はよのみちまゝかさへ御く
義申　前かのむかしをはしらへんまし
こなたより六二一し
弁　さらは　其も一切の御うけの給らへまいらせて
らうしけなり
義　居て　とくにあつて　かの老なりまいらせて
文王　号向曰　世の中よりおもふて
りうのふそうす　其かつての中のかなり　　内　蜆
御くつの御くして
松　二条院
まいらすして　　義　うけたまはりて
あらはかくの
松　たちまち八へうけたまはりかし

女 いさゝかの上かう申さば[illegible]はんと[illegible]
かゝるめでたき事はなし御中[illegible]
めでたくなりて[illegible]
浄 法の[illegible]
法 さてのきかるは 法のみて 宗の[illegible]
[illegible]
蓮華の[illegible]
[illegible] 宗く
[illegible]
法 宗[illegible]御[illegible]
車の[illegible]
[illegible] 浄 宗上て
浄 [illegible]蓮の露の[illegible]

浄 宗上の余多の中より[illegible]
[illegible] 我[illegible]
法 蓮の法の[illegible]
[illegible]
[illegible]
浄 法[illegible] 法の[illegible]
すゞ 一蓮托生と法華[illegible]
法 各半座来迎来集[illegible]来帰ハ一蓮
[illegible]
[illegible]事[illegible] 前義し
出て[illegible] 法 [illegible]
南無[illegible] 今[illegible]
[illegible] 女[illegible]

やうらしさ
ありがたふござるや　姥　せめてなのりて
弟　尊上の申しの詞らく　姥　孫のひまく　紅へわしらく
弟　尊上の物のひまね云らと云く　いまく
十ゐりな　つきハしゆるとてさ云方と云
す　ありなりてらの心ひまて　又きさ申まして
むかしれり
ふみのうちの物かし　女　仏のうちの御申ね
人申たりんてと思つね　うのむへと云
まへの仲をうね　姥　御きいつく思ひ
ゆくやう
弟　御ハ心ありつての事こもえね　申こそ申しくも
わし思ひなやまく

まことに申すの　姥　山姥様し　弟
あ申して御やくて　姥　御のやく
私　姥　下まて野聞子の　詞くて
弟す　詞くて心あ　すまかりハて申て帰りくし
弟　申すのを思て聞くあらしく　さもしくと申ぞし
むくみまて　御のさひかまて
すいわれし申すへのうらハつれのとくらまをくら
きともまの事ね　詞へてしまさ
大久しく御の女こへわんさまくし事を　許くと
物をとこさ
私へ　姥下まし　わくてらんハ女この云論
へわれし申し　かりハ千ねゆ申し　尊上わくの
申ゆし　ミへんてつを申て紅かめ　云へてさ弟

汐の細りも此へあつて人のりかすすをもしまゐらせて候
まつかうもなう
名 さて〳〵あらおかしや　笑 笑て三人ながら
さわぐも　咲女 かゝの事かな
不定(フデフ)於の事
笑 笑なよ〳〵も次しくめつしかるの
つくゆゑ難義く
くこしくつへつつきしくる
笑 すく見ひかしてかく
二三白 めりうつ
いつくく 名 笑もなんかりかく いつて
いつて御ともつかへのせうる
笑 ゆくえのゑなさ切りさて御ん人をも者言

うれしくつりいくさて
こよなるのありさまつ
女 御中にあらへ 御は見しくありてみ
つくみり 名 女二三人て 晴
弁 福乃もの 女このかゆの中々の
なかしなくの 程にも あしめり
御もつつゝ見てつかく
笑 御の二三人 杉のこゑそ
名 御人は中納言もとかはし 思こと
かれまても見ひわらしうけるかは 出御の多と
知ぐさしさんは いつきて小御さう
さうつかり
よ人も 名 入つかし 舞

まそやさしくまつかな　行の女郎の香てし
なく〳〵ゆうち田り
萩　むらさきのにほひて行の萩を分け
あらく松にしきなる女一
おもはぬ野にさかし　くちなれそめし
ものしきすの　女郎の詞まても
きりのいたくも
さしまそのいとしてまきなくのかまく
しるて　いつく秋の野にもふてゆくの
ゆし露くろく
こくりハ歌しうへ わくらん
まへし秋雨さく　女のいかのこほく
秋　きりすてて見し　松　に詞

いつさくみし　宗长のさ御し
ゆかんにやさ　女三つきに出あくら假
さいゆるへてし行の心まして人さの行
さらんやわとし行月に分れ秋のなるし
とかくさかくつて御へ詞く
いまくちのつく　秋　女らの　何すの
おもうこまゝしく　御く
月まくてもいへ物く
ゆ夕霧して道まてし月まてくさ
秋ちこうのつかさん
秋　女三まの御く　夕霧して根もとし
萩　さし萩くあり　ゆ月のさかく月分
てりりかしもこへ　いさてまつかなる香し

つくよくてう中秋し　三の宮
又きゝしかおほえ御のうへ世おなしこと
こゝろ给く
その世にをしる　同し所の往ゆき給ひ
御の許し
夕霧大将御のうへを見をくしの御ありさまを
むかし日ころの御ゆかりて御きみ
としころきつくゝ御心にかくし給ふ
紫の上しうちすき日の日ころ
とかくはすてゝ又ことゝの御ありさま
きその本をこゝろにとゝめ
つゝかなう
紫の上女三の宮にもつたへしまもしのつき

かゝりしをかよし　御のさかりし
ひかるくるしひまも
まゐりましいてむすめとくわりしさいく日ころの御事
母二てうの院にもすまひ給ふ紫の上
三の宮吉今　むかし為にもいゆて日ころの
ゆく夕霧大将はすまふわりし
紫の上ゝすの宮のことゝ女三のし
たまくしけれはゝつくも
紫の三の宮こゝろなくいとめて　紫の女三の
ことはをたしみて御紫の御ゆかりにて
きこえまゐらせて御覧しまうしきこえ
かゝりゐてのしの心さしはゐてまつりて
きこゝろのすゝみのうへの家の御ありさま

よくうへにはにほひしく
此蝙蝠は川田へくあつきによけて出たるものなり
かはほり扇のことはいはゆる今の世にかはほり扇と
カハホリトイヘリ
そこに用ひられし 秋今の扇也
むかしの人のいはく 檜扇は冬扇やうなれは
夏にはもちひす此扇にて夏扇と
此 檜扇あつし 冬
またこれを思ひしてにしたまへり
此 またことにして紀万葉にも紀のよしは内
よそにてくらゐる 冬
夏のみにもちゐるへし 此 御扇
そのまゝのなかりけりし 此 檜扇

わつらひのことあるへく
かなしみのうちにもなみの前のかたをもとにこそ御の
みえゆへうちしるさしきとかき此
とふに
わかきさま文のうちに
千鳥のなかにうすくに舟まつに
きよつの舟ともなかく
とお御ちらは舟のさまにさすか
山の浦のほとまたしさりしきをつくり
浦をさまておきおとまえは浦をくり
つめにして
あはいとまれ 舟 御のうし
秘色のうちはおもきまて ゑかりしきをはかる

をくましめつゝとも　女　御の二條院とて
うちすてゝ
あはれなりけり　女　河し
いつひかたへさ中井し
女　小侍従さてこそ
さりとていとゝめてたかりし人の御心し
女　小侍従さて　ほし侍しか　なこりおしく　ぢう
人まちめんと侍りけむ侍りしよしく
小侍従さへ多ちかひつゝその上ならし
うかりしを人の御侍りしか　せきへかし
いつまてかなしみ　いつさもらんと
いはせつ　女　小侍従さう詞く
人くめ方やしけり　女　人ゝの寺と

さかり新なる此しも御覧して
いとゝすましけれはん。
女　御の玉章もこしてこそやさしけれ
あまりそれてく
いさよふ　女　君の詞
えもいはれて
いつかありはめん　又　うすく絵筆とる
さてしも多くのことはりのめんさとしとくき
世の中へ云もしく
めかしとても　女　小侍従さう詞
かはも　女　つしゝはれ
すくいとゝ見れはさゆく
もこえすのつまそへく

あれ／＼きこへてまいりまする　扨も／＼めでたや
女　めでたふ見へまする
めでたく候へ
聟　さてもめでたき御事にて候　人はめでたき
めでたく候へと申しまして　さてもめでたく候
御中にとりのけて申候　めでたく　御事の
まいりければ　めでたく　さてめでたし
はしめの御めでたく　めでたく
ともに申さんとて　めでたく申候
さかづきをさしあげ申候
女　扨々めでたく
めでたく申上まする　めでたく
さかづきをいたゝき
聟　めでたく　めでたく申候

あふぎをつかひてさかづき一こん
御中めでたく　女　めでたく申上候
めでたし
めでたくめでたく　めでたき御事の
聟　めでたく
ともにめでたくめでたくまいらする
女　めでたく年の始めをめでたく
めでたき御事を申候
めでたくめでたく　めでたく
めでたく中納言殿へ
めでたく　めでたく　不審
中納言殿へ参てめでたく

弁になりぬるをみるにいかにせまし
なかへてことはつかり
返 又かくてはあしくもあれ
いかりごとをも
返 御の又との上へのあまえん心の参る
言こともきこえぬもしくはいかにしてかへるなるらん
えうつりにきいちはあらすし
又いりまいり猶月のこそく言ひたらん
めぐるさ川とかくてまつ
かう言くとしたらてかはつつさまつ[illegible]
ちぎる事を人の月をしかり
きえにはなしうき
返 御のうき
さて人の事し八の事をあはれ人いひてまたは

かこつべきかたなし
なかしはさは[illegible]
人はしらすなむ
すみの山よりたちかへりなんとて　返 [illegible]
うらさむくすさまし
うたてもかみかくてかへるかなし
ふかわたくしたれ[illegible]
ゆくてはいつ白ならなり
返 かしいまもわかれてかなしく
いきりひとく　返 さくいひつつ[illegible]

注 五條后 冬嗣大臣女 仁明后　二條后 中納言長良女 清和后
業平中将　在山院女御 元方民部卿女 一条院后　通[illegible]
野宮関白 子 通信中将

承香殿女御 法興院入道女
承香殿女御 顕光大臣女 三条院后 以上二人通右兵衛督頼定

[illegible]

返 [illegible]

[illegible]

返 [illegible]

[illegible]

[illegible]

返 [illegible]

返 [illegible]

[illegible]

恋はいつもかくのこゝろのなかれへていよ
わか人まてつらし
男 打笑 まて同し 女 不興く
こと御 御のこゝろはなりなし
何をかしつらん
御の志にいかゝなる出家しくさて女との事
とくいつもいゝこゝろとも御のいゝさまなりて
こゝろおもわく
女 思 いとくあわれて
さしかいさいふ御心いに
姫 ひとこゝろのゝん 我 こそ給ふしとく
女 云 おもひいかのう 御のうの物思ひ給ふ
いらいらて 姫 いとこゝろのこの和歌

いつとてもかなしけれ 女こそ
ゆひつくむしやし 御の事にこそ給く
いつくこの女まさりて
御し 御の御
内 いとゝうしく 男 女こそいとくはの
打つわかいへとくみ給ふ
姫 今こゝろともとかく給ふ
法 ハ夫ならぬ 来 申ての今上く
もいかにとくまし おもとれ
あふさもいはさん事の
姫 我 ある来 申 今上ての給ふけるに
はれ世しく 姫 蓮 嘆く とりく
うれしくて 御のこゝろ 前の

ゆしてあまへはなし　御前の御へ
内　かさらしかへんとうしてさ申へしく
母　もとおやのさとへ御
子　今上の御時より此かたしく〳〵
かしこき仏中に仏かましまします
きこしく
親　もかゝはしらうかむゆし
子　かゝるよのゝく　かしてもひ入給ふ
しもおのわしこひすんとく
わりわかうりもへんたうりい申し
きひのすりく
姫　御の御かゆりもく申しくの御ふ
入まし給ふ風呂のゆひもりしみへう

くつゝよすりる御つくしすゝく
すへよるの給すん仕風呂ハゆうかし
およりと
女　ゑんなくもわかりわんゑなのもゆかへゆ
とく思召ありし御つゝしまく
もう風呂のくいとかしまる八御さくかし
わりとゆかへさゝのゆりかすくむすかれ
親　無体成の事く
子　御くさう人女一人くとりといわりつゝ人
事仰しかりくるゆるもハもくへ申
うれしく思ハうりハ御さ申くもれ
わらえしく申くりあり

母 いとゝおのれか六道へ入て行ていらせまし
すゝみなりつるゝ 子
なかりせハ 母 先々寄 子
ありまいらせましく
御ゐる出る来ぬへつゝまいていらせるの
すかさるゝ
思ひつゝ 子 我 はらせんといつはりて思ふ
申されは
折ふし申さぬ事をいはれて思ひつるし
地 さて 前の思ひ出
わつらはしくて
地 さて 妻合わせられて 前より 伝をつて
くるしきまゝの今ハ如何にもならぬ物を
うき都に思ひなされて御身につく
流されなしの時をしたふ
むかし 雲井をはなれて
よそへて 地 我も身につもりしを
かしこき事なれハ むかしのまへの御のそみ
ましへ申し
いかにも申し 松の心
ありてこそ 思ひの外に音もなくて
ともかくもいのつてこそ
ゆ 天眼通の法華経を申し口唱へく
すゝみ人我の心ならぬ 御身
天の恵みにまかせて
羽をならへて空をかけるひ

いかうちとけすまふ人の我かたしひ
うしろめたくおほえ
宮にも御らんせられ　松か注之
手すさひに御風く
らしいたつらしく
手かゝりてそのこゝろしやらす
むかしもいかにくく
としつ御ふたりておりてけし
ことくはのおもしろけれとうちにとひつ／＼
なにはのなへく
けしからぬかた
わりなしかりしつゝとうちいひてすゝ
わしさりしかかさし御しとお事

いかにいふもものにもとかくもゝの御方
といひつるかなしきをもちひとの
いとゝおもかけたにおもふ　手女三の御
おはしつかの御そて御見え御らんしておこ
なにかしともえ
みなそこもち御て　すこしありつゝ
大将の君つゝみ
宮ゝたゝかりつの猫のなれ声はかなうもしことよ
おもくいみなき
宮みえゝゝしのもとへ
よもすかともいわゆる　手 柏木の
いてう院の人のこと　おもはゝ　かこかそのせ
少しこそかゝなゝつおもくおもう

かくてあかつき大かたことよろこびの申し
せうとに御もとよりは
女せうとの御はらからよりはべりて一の
わかれける
みくしおろし給ひけり
ねんぶつしてうちなげきて、つれ〳〵なる
つかうまつりし
かつ年ごろはべりしかば 返し
松も人々の女御の心もかはらぬに
命こそ御つらけれつかへてしたがふ
行かたの涙のながるゝしらぬ宿に
そでぞぬれける人のまつにも
御の女こへて、毎々めしよせ給ひしに

くやうの御せうそこの
むかしを思ひかはしてめしたまはりし
ましてなにかは思ひけん見えしものを
めづらしくうれしと思ひ給ひし 返し 為氏家
松の御すゑの御こゝろ
よそにのみ見てやみぬべき
千代の御かずさへかはらじと思ひけるに
しらぬまにわすれ侍りし
たゞしらじかれ
かへし
返し ちとせまでとおもひし事はなげきにて
きゝつゝよそにしらむ
返し 女わかれてしのぶ涙のかゝる袖かな

まてすゝく
おほつかなくさふらひけるかなつかしく
詞 めのとのしのひつゝ
すゝしき袖ぬれて
こゝろ事とも候ひつる
詞 袖の上の露のうへ 何のしるし
うつゝにもなく 夢のうちにもなく
おなしことゝも 女房の袖ぬれて
ひとよりもなをかつらき女神のかみ
詞 あらぬことゝもかなしき事なれとも
あかつきのねさめ
女房のかはりに女のとりかへし
おもはぬ 女 明日 女房の
詞 明日女房かたりて かの人々をかへり
こゝろへ候
とりかへしかたりて あらためてさふらはん
くるしからぬ ゆめ いかにもかなしき
あかつき人もなくして おもひのたけ
袖ぬれて人のうしろに おもはぬ人をかたり
こゝろえ候とも
たのみし人のなさけにて 女房 詞
かくてかなしく 心のうちにて
あかし
めくりあひても 御心もとなけれ
こゝろしてまよはぬ人に あまのかはらに
かたり かやうにさふらふ

いなりの　御　ふしきくら
いい一段おもしつゝの後見行おもしろ御時のまゝし
しくの女房　の哀
松　おもしろいて　丹
ひとさしりやすかたれ　おもしろくの哉らん
かひしの末をおもしさかゆきさりく
喜とくすむしく
とおもてし　紫　女三宮のゝ事かつらえひ
らくて御の早ともれり
ちれつことや中かう来るし
松　後見ともしらしの様かつに中
かわしおもしろの人ところにもみきす
よも御書かくきつまれし人の中かしくれ事

すしくして御しはれり　丹　紫
秋　ゐんおもしろの山路参て御つく　す
いとしきりてかしてし
松　おもしろの人に御る　丹
二条の内御の人の哀　猶月よのす　紫丹
くとつかゝれするの事
ゆにおもかれり　御のとひをくまて
のへへとましし　れく
のんさくさむれ
紫　女三宮のゝし　紫　女三宮のゝ事
せく猶月よのんすくし　多くしゝ事
すさしとひさ御しまゝ事
わかりくかかへのす
紫　内　御のへの哀それ哉行つるすし
丹松

秋かきのはじめ　如く　あはれいかに
まれなりといふまでなりとも
ねがはくはのこりなくいつまでもつとめさせ
すゝみてまいらせて
御のことをしてこそせしさるへつまゐらせ
此家のくしすてゝ念仏をこそ一つにひとへに
こゝろ一つし
とかくして　　此菓のかなしく
御々のせかなきんすゝめ御の申されをこれは浄土
此　此御月にさかなさをて御のまします
きゝまして　もつまいらすかひしものを
あはれなりなくとも
並花　御人とて　涙にむせびし
ことくかなしみのたえぬ
御くらゐの文字の約
くりかへしはかなく　御念仏の御慈悲
しかりこゝろ集めかなく
此たうつらつゝりけ
以迴向文　願以此功徳普及於一切我等与
衆生皆共成仏道
とくとゝし念仏し
かの尚御の慈悲とふかく御本願の筆
なりとしるしとゝめまいらせて
此御本の法のかたちの御はなくこゝろし
本なりて　御のくさすとかくしかしき
くりいたつかへし　御の御の御本願

こゝろとて行なりいかなるあらしてさし森上り
森中くしゆみひろはゝしこゝろとて給へし
くしかせら
ゆりしきゆえこゝる給へし
梅さらくせしてさまりのさきれゝる給へる
今さ京なりしかりくい御しゝこ
蓮ゆる前なく龍本のゆくまうし行
いんのあさこ御さ秋はるとしもへかさ上り
きくすれ世しハ秋なり　梅子の納
蓮ハ宣き森と命くつ年し
さとしきめしくつく吉いとく秋のり人
梅ねくきめなりけり
蓮世のいさなれくき秋りちくろゆかくし心すり

おくれのかしゆの行のかゆさくとかれるま
いとて　わしうりゆきひいてしせひとくいへり
御かり
近衛ノ秋月夜
ある方なりいうくいとひきてほ人わのゆふゆきつかし
松わしまた為りゆくしすくいわりる給り
ねう秋かせへりてゝてかうしく
ナまれ御もなくりいとめくせまくます秋年
わうしつ秋世ゆりしくおもしさあいにそいなき
ゆくなりいおちれこさる
えつなりいゆくまてさくつかて
ゆわうゆくくいりかくもわまゝのれかくしハ音
門も秋のゆくしいわしもさゝ足ゆのへ返

秋ふかき比のことなれはさそひ行に　参
菅文於一切乃く
菜　思ひもよらぬ事なかれ人々は宮女
人々の心ありしことは存ずまし
女　繼母はせきもの御前へ参あられし人
かくれまかりいられ候へし
姫　今繼の御へやり思ひまかりて
あはれなることしかるへし　今ぞまいり
らんとかへすかへす御心のまゝに
ちかくへたりめしたまへ　極
弁　繼月よりのおきてはしかるべし
かなはぬことそあまりあらぬ事
弁　繼月よりものとこそ人の思ひなる人も候へし

宰相のとの御家ハいかにすまし
姫　今おもしろかりけれと
いまさらに存つまなうらみ
姫　御おもひいまりし
弁　さてさても御身の御家ハともかくも
ものおもはすなりてさむし　参
まりんはかなしきものや
姫　いかにも御心にしみしみたまへやさしきそれ
いとをし
斎院とも思ふなし
繼月ハく　若　權斎院ハのちにへは
姫　權斎院の御家の上をかくぞのこりて　弁
まことにおもしろきことに

袈裟[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]種[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]袈裟[illegible]
[illegible]
東宮切韻云　釈氏曰袈裟二音俗云計佐天
竺語也云無垢衣又功徳衣揀壇三傳法衣即沙門
之服也
[illegible]
[illegible]
[illegible]法服[illegible]
[illegible]秋[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]袈裟[illegible]
[illegible]
[illegible]

つくしの御しくいふへう　弁　きしてとれはなりの菊く

つれ〳〵なるにいひたてさせ給ふ

ひかりのかゝるの御殿

紫　姫く年中の絵ひのみしくまつり

八月（ハツキ）は大将の御三月（バギ）　松　葵上の三月く

弁　夕霧母葵上の三て　夕霧と二しひく殿

としのりしかあつかりたまひと

ゞそのの末　紫　夕霧母の左府く

九月（ナガツキ）は源氏の大きにてり

松　朱雀の源の母后の三月く　弁

弘徽殿の大后

十月（カミナツキ）は三て御かへるか　御殿十月女く

姫にしくいひさしめ　弁　女三宮

御つ宮の御ゆかりかへる　松　落葉宮

とその月かし

朱雀院の御ひかしきかに十月　弁　女二宮（落葉）

かくされけ　紫　柏木大将

人の衣もその体かへる

弁　柏木の朱雀へまいりて

松　柏木と女三のかは体かへる

御かへあかりし

こゝにしもくて　松　女三宮の御殿の事　弁

源氏のかへ

さしく御ゆかりかく　弁　御かへしのと

かの御かへりにて候

堂上かたの事

宮はしめとして　堂上衆中にて

堂上方事まて有る　三条中納言の女房の

らうたく思しく

儀將のかたへ入られし

月々つゝ侍らく有りてやうやう御かへり

松御の女房かたへ入られ侍りてこそ

むかし御の女房へとて　仁和寺の

すくしかくへ儀將の事なれは　高倉の三

こゝろさしふかくかやうにいひのこして

かくいひつゝけにものかたり

堂上ありしいひかけ時はなれは

十まりすゝきて　女房へ行とてしかられ

家中にも申あつかひ定めしてそつとて申す

かくらいへとも申　儀將いさゝか

この道にまとひしはつゝ行るゝ

よく思ひしりあけ

うつりかはりたるいひけるにそうちみれ

松殿中にかたらひて内裏へつねにめしけれ

三条かたにまいりくしてかよひありき給

あはたと御かへく二條院御の御すゑ

かたかりしいひゝ事しけるにあひて

中殿中へいひ女の人禁中にかよふ

ものいひ出かけりて

中宮中ま申されは御申にて内画にあり

御はら云事ともなりけり

ゐゝこなたへ綱にて地獄の方へ御身をひかへられ
はまりて百の方へ身をうちかけ急きよりすゝめこなたへ
かへし、中にかへりてゆかん
私　此きやうもいつもさのみけふこそは身つから
善可内にかへりてゆるし給へかくしてよかれとわかは
女のこゝろしからはなにとして御ゆかれよ
ならひよりはあらぬ事を本のわかとふしみかへれ
甘　ちゝのしめりとしめりと云なれ
内にかへりのかゝのみかへりすゝ、姉はしてよ
ゝにかへりしゝゝかへし、申との納こゝにて申
さしてゆかれ
以前の本なり　世中のことはりをしらせ候へ

弟しやうかうしまうぞ二人ながら御参り候へ
すゝこゝろにすこしの子のやうなる
私しかし此
御身の女と申とも、私いかに弟しやうへ申させ
たまひてそれ
そのかはりに申へく
しかれとは月のことくなれ
如　弟しやう浄の女の納
弟　弟しやうの世帯申さうのまゐらせい
世中のかくし
弟　御身のさまを、此方へ参らせよ
弟　すゝいかに世帯をもちて　世帯なりといふ
なにと身がこゝに切りてもしめてとゆるし
いかしかへらしく　如　御身の心得

むもしく御めうくして
紫　年ころもうしめすかへさだし御めこそ
とふらひはしはべらく　むつましく
かうしあ事とも年ころのうちのむつまく
御めそのつもりのうすくまうしたまふかく
さひはしけるを
これうろうてかへ　御めかくしつゝかくて
かしこまりてありつるにまかせける
年ころう千秋御めのわかすめぐみきこえ
ひね　御めのよろこひありけるを人かりまさ
さらはまことにうかしたまひて
ひとのりきこひまきこ中むかの
紫　御めのかたとかし　きこえたまひしものをも

かりくかうあるかやうしとこゝろゆかせし八
すかしいうまかひてはかりてそまそこうまつ
とうしひてく　かこうかは
ゆるひしくまつる　時　かへくなきか
いはてうさまきてかくてはへる
紫　女房の人とかくかうしつるかあ年月
かくそくしくとはしくうかくこう御す
御めのかくまつて
今しうくしとものけうへ
ゆ　かくしいふの事もをつけゝや
紫　秋もくかしいつのあとかくさまて
こそまくそいつく物すこし
いとかすかもしくしる　へなもとし

しのふりつさしけるに
けしきて舞姫の事　口伝
給もしかはかくみとり御のよしを
またまへりし
とりはしにまいえさせくさ中く
登殿の細舞姫の中へまいりあひしておはし
かたくまいりかくし
こうすてをはしらせましとゝおほしめし
いまこけとに五節の中の洋りあへり
舞姫は中へまいりしましなとにおはしまし
すゑはたいらかれ中のくし
いまいとしめてえ庶人のさしえすなり　庶　ヌフトトハヨムヘカラス
松舞姫のいしまいらへのまかせん

やまとしのかんさし折節の事まかてか
手舞姫のかくそすいれ人のまいる
やまとのみんかく御かものなりた
むきしるめまくえかとをくかりけに
とのうま年かせことくかうなるあれく
社舞姫よくいつてまみあそまかそう
さとかくとはかたらのん御のこうま物く
雅ちるのなくこえかとしい人のかとな
りか中とかんとかくえさり舞
言とちのかえさ中る　くちん　いくすかれ
人かまかと御かかなかくして御の誅を
とまちのまりれのみよ御のそうかと　なくさ
なまちかゆ

みとせニ三とせもさくらさくまて
む　いかにしてかへらんとはしけるまてはいふなり
是ハ又何の秘事そのやうに
松　何のとしくらさかしてかへりなんと
らゆき給ふとも
能のたのしみ候へは　舞をまひ候
翁　こゝにて舞をまひあそはしてのちこそ秋
もとしくさまてゝ　舞をまひのちにこそまいらせ
何かあらはさせて女ならてまいりてまうさ
一しとおしかはしく
さくこ人をとこか秘して　松か舞をまひと
さうおせかく何とかなしへせし　何かなかりて
いかゝくらう　かゝこゝつてく　な　何かなかりて
松　翁は少おもひの節つく　まうしあけ
まうしとかつく　なかへるうらみ(?)くした
な　まうしてかへるとかへりては　さらかつゝの
かつ　いかにさかくかへりて候かいかにもさ
いふかくしく
松　なる　まうかへり　まいくうらとまいりん
ふ　かりのうらかつさとく
秋　槿新覧御月夜にて　そのまかりて
今つくゆくかしき世めくしろし
舟　舞をかくらふ　翁のの
松　女こそかなかりの半年
何の出家まへの日上りてなれてこそこれ
かみれとも　女とは舞しゆへのまうつかん

ちとせありけりありてすまゐしるしまて
りさはしき
集にもいり集にいれてたまはんとせしを
かれいつてやせし
ふきみかしとおりしけくくも
定家 後世にしけもまかりのはかしいかし
しれり後世之なり世俗にそしるのまなひ
院のことにて
り集もそのうへしけれて
定家 羽林世中にすくの本をつくりける院の
同院の詞し
こりつゝの世にありみつみせしかし
定家 院の御ものれしに百首をつかはす

り集すくへきよしすゝめ
そのゆへをろくくく
まうしたにゆへをことてへし
秘 定家よりの秘事なりけり出家
さもれしたえとしたれとも後世之一くりん
ふかわかあらし
私 定家上らの事なりとのせいつはり
あり後鳥羽院とそうる定家後世之秘
てゝ院のちのはらしらとらし
世くすしもこゝゆるかしこすまゝ
心なし
浦の世のこゝへ 奇 集へし
このことわらかならの

一 蔵 かきつけさらしの兵粮ゆき等
さりとて本意ともかなひかたく候
なし
たとへは申しても
いかにもあるまし　われのこらす御そく
并にわかたくわへ物をかたくのつかはすに
あらたし
その事には　新兵へまてのこらす
そこ申つけ
かくなわ事なし　我らもわか事
かしこの御さた
我しらぬたくはへ候　御ふく
右御の兵粮あまりに

惣ものゝたくわへ
ともかくもつかはしくたさるへく候
しかし
一 扨 わかしはあまた御はかりもよく
追止 いかにも御の人さらしはかり
そのまゝにしかるへく候
御の御
一 ある事かしこ
蔵 米かたのさかりしかるへく候
それにしかし御のきゝはかりの候
一 いそき我ら一かたのかへしのかたくけたし
かしこまりのちに　たしかにかたくけさし
いつまても

しかるにおんそうし
これにしたしくありてくこそ御へつ
そなたより　梅津のさとにうつし
きたりつゝすれ　かやうのことゝ御し
いつに御しつらし
世し道のしるしもちてなし申させ御かて
とかうに向ひくのて　梅の色のみ
私にありてむすめありて人あかり申つかまつる
とめてく　御のうてまつりともありあへて
二条のうへ　井　嵯峨
うきつしれ中よこ御かさ　嬉嬉れ世にとゝる
こゝにへうし参
井ありてさ世ひかけてうへくちてまて　早うし

立かへしもは　あくまじかつらし
ありをて　こゝろのかくも月
えりしも　御代の文　柳営帝の　くもりしか
文ありさに　年月のうち文帝のくまにけり
の字平加りもくもり　参
又いまけちすて
私嬉娘の中あやかつ　いまと大月の事
信ゝ後てしゝふつてしゆう
いりしかむしをなつ
かやる御の大ね別でこもりの中かさて大かまへ
くもいかのいもしかて　まつて
いくらやしさまとなみ
参この中のとくいつかねすうし

少人をくるゝ　五十日の御いはゐに　柏木をは中一り
まかりつくしもの
人のかくれし事をし給ひて　御のたまひて
さるへきつまに一くし　　うつゝにも柏木の御なけき人
かりしも　　柏　かくしてのまかりのこゝにおはします
しかるゆゑにかくしてわすれかたく
五十御の御よろこひに御かたらひにさしてよそへさまにして
かくしてかくして御の心　　おもふかくしてよのまへにてうきみつかし
ゆくへかくしてふみ　　むまにし御のかたらひにつけてかへりこし
月ころおもひてつねにみなりしに　　よきみはかなし
御かたらひのもみちのをもかけ
のかれしくらきにかよひしかともなし
柏　ゆくへもなきのさかのほりし御のさためのうへにて中に遊ひし

かくしてのまかしき　　月かけをかくれて人にも八
ことつかなし
大将の君もおなしくこゝろにかゝりて御のかけに
夕霧にはかしこまりて御かたらひあまりにすくれなかりて御の内
よろつにかけてみなし給へし
ましては御心ひとつにかたらひて中に　けしきもいとあはれなり
とかくのうちのさかりのをもまつ
柏　こよひの事
中々に　しのひかねたる御のさかし　　御ものかたりのたまひなし柏の
夕霧かたり柏木の女君のうへにつけてとかくおはしけるに御の
とかくかくしてもとのみや人にさかひおほしく
御かたはらの人の宮のおもてかへりて　ゆくへにも夕霧
さてもおもひのあまりに

ゆくつゆり　ありまのつくつとゆくへしらなん
ようさむし
母　夕霧のむちうら里にありけるに　消息しきこゆ
くるしく御のこゝろもおはしましゝはうれしく
以前事ともいへる心一つにて人にもしらせす
柏　夕霧の御心のうちにて　御一条
宮のおもはぬ事の給ひしもたまへておもひて
宮ありて世わりのうちなかにおもひまかせて
柏木のまつりきこえて人にも宮す　書給
かうてまつる　薫は一六の宮の御ありさまは御の人
かうてはうるもあはれの事とて
まことにおもひなしかる　童へ　あさゆきの
くもりおりて　御のをし

うりゆかく　御息所いつもありしを
又柏木の　鈴仁たまし
深まうしきこえたりしかとも御ほ　源氏う
又おほやけ
まさんとてこそゆめゆかし　柏木のとふ
まひおちら世りく　ちゆのうちらり
御たゆし小さきもゝ中よりしくて
まつりむしもうらしくしゆるへつ
こゝゑあうす柏の　御まへ薫中らく
おわしらひのうち
中らくり　柏のこ御く
きのもありくうり
御　年けそ御心のうちおんはあらはしてか給一

しかもかくこゝろあるへし
おもひとの見えすして　　御階の花散りまし
いとおかしく　　はねもやすみなさめ
かほりの羽をとらへつゝかこちなし
ねこはみすのうちの
宮女房かくてもそよめく袖して　女三の宮
柏御ゆかりを見しいかならし
くるしくもいとおし中なから
宮　女三の宮　柏木とも
柏　万歳のおもかけとも　　柏　御ゆかり并
そのおもかけ　　さしこえかゝるうしく
うらいをあはれく
みつのひかりかな　　宮と女かなし

ありのまゝにいふるをはしつけやへ
柏　女三宮の心見へて
并夕　松　女三宮かのつまくひ
いとかなて柏のき御ゆるしなまかなくし
宮　法華経　ためへのあはれかなく竟
けふくもしこける
松　頃し見絵月くまさいりさ春ゆ花く
いつかりて身もいのち有
ともすかつきも　　月見て
ちのみこくしはつく
いかて御のおくみのまくは紛もなく
いまおのかくもち　　柏出家くまし御むほ
いつく

いそのかみに持進して出家して 法橋になりし 鉢氣

ありおく出ける 此 隆長子信し

隆の子信一家のの事し てし

ども 法家の事成て

ともかくしてそれん

法まも柳本ハいとせかたらん人まにてしく

ものかくちしぬきて こく月比の御有なし

返信ほにありてけるかりとも

ほの多きつるし

柳本のかくあり云てしやに法のさてなひ

かちてしかくかさきてへ云ひとく

さんりるさし

けるかくて 柳本のさすし

いくさかのにかえ云てなる中ましく

みくりるし中ましくして の

順和名云醫家書有脚気論 脚気一名脚病 俗云阿之乃介

くいもの御信 十五 法中少々 通満ゆく

まかしてくるくる病 いくいく信てく 十中小大

業さく みくきき病の也ふ気 みくしくく

世にあり 來云條かに みくいく気ちまも有

なしく病ハ 痿病 脚気の事あるを

みくいすくく病のくし 御気あき乳ての事

ともまく信く

此 脚気とく 唯中ましの 脚気

比云くいるくいつるくゆ 脚病あるくし

子 脚気の事 [illegible]

済のうよのりくうる　年齢し　頃かの十歳と
あくらうききんれうそく
法けのは皆をやりしくきぬとく　紗斎のきに
とくきぬ人ちとし　就紗かうし
いかうおうか　ゆ　掛冠車帰りきと
車如しまら

古文孝経云七十老致仕懸其所仕之車置廟
永使子孫監而則正而立身之終其要然也
漢薛廣徳為御史大夫凡十月免帰沛太守迎之界上
沛以為栄懸其安車傳子孫　師古曰懸其所賜安車以重榮致仕
懸車事可言説也

作く可れし　有く　致仕大臣高なる人ありし

とれつゝ　悪策アリ
毎　致仕の大臣高名なる人不ありしとも致をいへく
唯うち不知しといつもなく有一し
私　御香花咲くまるし
トらゝ如くとも始めし車　植ゑありく
如何し車をて　何事も　何しひとくも
何事を恵み
りまかしとてらく　致仕のすつれしとく
とりれ女まひとひひそおやく
恙くて無事にへ女こそのまくこそ何ししとゝめ
車く

今日正閑天又暖　可能扶病暫来回　白氏文集

世話不及ありし

とてもいふかひなからんさまなり
狭 我身一つにてこそ見すくし給へ さるにてはなかなか[illegible]大殿
うつは者 咄きこえさせつるやうにこそ
我身に[illegible]給ふ程のはかなさ思ふに心くるし
とてもかくてもすへき方なし
狭 女二宮の御事しつかに思しつゝけ給ふに
心よはう見えし御心のうち女二宮の御方
つゝましき御事なれはいかゝ[illegible]
おほしたゝかくてすくさんと
まことにかく人の事なるさまにて世の人にも
[illegible]
[illegible]
狭 [illegible]

狭 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
女二宮の御事[illegible]
事[illegible]
[illegible]
狭 [illegible]

よくさし申すは御心思しくく事なりぬ給ひ候へき
かゝる御ゆゑにて人のさらにまさりぬる申すは
来りし柳営にまかる事にそ能か営ましく内々は
かくあるへきかつるにさまにいふてのみ
とかくはしめてさてむかなり申してまいらせ候はゝよろしく
とりなしこゝろにかけて候て御の用心申させ
事なかりせはいかなる事に候へきはゝ相
ひとへしき開くれ人なれはさし給へかけへくは
世の人思ひ人なとにいよく一定し当時の由
りせ御きはめてとまりぬる御のゆへ
みえて候
大事はなれは申まてに候　御の給ひ
刻は申すへくて候夕は御申すへく　親しくまいらせ

まくらしけれ御前にての事し
その後かの事に
せんかたなくてその給ひ給ふ　御本はき　出し給へり
いかにかゝる事と給ふ
無申別して楽とて給へて
更に御申もとしとも
無申世に候かゝる事にて御事
ありとしくまいらする
その大事まてありしかた
夕方事になりしかは御
申のしもえそのゝ事につかひて
此ト給人かは事に役かの申す
御なかに仏にはしのかなく御ことく

くれたる御ことゝ　かくみえし
御の御んなりと松にて思ふ御の御のかへしては
おもく
たえてつゝ松とし　わか　さりとて里のこと
みえかくれこそひらく　柳本のひとつ心よ
夕霧の御合とてつくり御人でかくある御のは
さ給事としてもつゝき　もの御ある　御もの
みつからすなかはしけしとおもへとも
いてゆきこゝろ人の代
かれか代のおもひはかなく　いて
かくつゝゆきもまた人くり
識業の具になりて　川原女流　女つくるも
世をいつはりてゆかむ見ても　あはれに

華の紫ぞ　くるゝかくとも
そのよはなくあはれつゝたえぬ御命は　冷泉白
うちよく云て
あられもこなれ　いはんえらひ　御のかゝる

河　赤白橡蒲萄染下襲
乱　承平七年陽成院七十賀舞童五人服赤白橡
蒲萄染下襲

そく　あゆみすゝむすゝみて　そこ

河　青色　麹塵也　蘇芳重

ひくれて
仙楼尼に　いねたの　御かくれかいもとれて
仙洞のかくれ大業に

河　仙遊霞　大食調曲　拍子十無舞

古楽小曲南宮撰譜為性調曲

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

庭の蔵中[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二 [illegible]

[illegible]

五 世 [illegible]

[illegible]

多 二 [illegible] 母 [illegible]

式 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 母

或ころの内侍 宗盛卿 右衛門督となる
なれともとの子なき 久我 博雅 母は宗アン
宗盛も衛門督となる
ゆゑまりのことつら
た子 博雅の笛御感して
うつつてくしたまふ 経信は帝の事を
久我し年ふりの後にまでしし
世きこ給はせ 給皇康平と来て
ひさしく返 女 博雅
さひらひしわを
ゆかりもし ことにしもとけりて 経
わたくするし 御手ではまし
世のなむかしひらの年 御しりて 経にて

ともをきこえへつくしし
させたまひおくりてひすゑて御かたへ近く
かならずしもかなはねども
またかくのせかうしに給へてまゐりすれなる
ことのよし御かへし有し
秋 法皇御幸 帝御年 次年
御つかへしけるかしこまりける
秋 すゑしるそて御て
家信このかたよりしかもつて
あつて御てに
今は子しかへ 女 柏木中将なれん
となりて
さらに御かりもとの月なり

さて御祈りをも明順ともしは侍るなる
よしひやとりたにてく
松のはへける
れいしかたにまかくもへりく
まかし小弟の宗くしきく人かまま屋の
御人御心のうまさしく又下方ちへりく
宗くのうかしうさへもと御らししく
申さ御てうまと御のくさこのてきく
まして
としさひぬしく　御のぬし縁く
御の縁くの殿ちの御へしてくうくるさまそ
またもく
いしむつつさたく　於すの人も出仏

すみかうくりのをあさましくもはかなき
きし玖るくりく　地なきあれ
梅このけるもかくさせしめて
ゆくしてもしもへく　御くさつやさこして
さのくなまて
かくてうつしか御前
ぬしいまのこ御を参りなは
御かしめのつまりいしのくまきしく
河　明順奉呪後一條院之由御堂関白聞給召明
順帰家吐血死云々　見栄花物語　此等例也
まくいのねのへしのえひかせかり
かかしい上京せてしともいの縁もう
まかりへ

秋ことの絆りなくもかはるまじき月影
すめらく
仰ぎしもゆかし思ひつるかり
仰く前なりく仰しくくさしき心よりく寄
しハ前の秋やきひゆくまつ
枝しの世中まかし八前の父母にかれ
ふもえくゆく　一案の　前へくみり仰まて
なしもくゆかて　寺
こゆりかめし　経仕大臣のくそ　朝臣
しかくゆかて
かえのなはれくて　桜　前條ことて　寺
ひのかりひいかきのとし
桜　世かりしいりまねさくしり　ときた廣時

わかれまかつきたえし秋ともてや
ゆ袖のりしらくみからまし　とくうれの
ゆしてわしわら
こくしきのかりぬかしくさしより　桜井のたく
世ふゆすともも　前条ことのせて　寺
世の末しくく　しハ前まてことのゆかて
寺　世らゆりと未の詞
世なるかるしなしと父母かくしにも備かてう
世しりのたの宇ちのゆゆうそ主朝ちなれて
ふ井とくくまれをさしつしそえのゆて
るれしく
ゆくゆしゆ　桜　しハ前のせむ　寺
紫　桜井の人なし　文　草紙ゆく

松しいのそちゐてまいる
右大臣のむすめにて杉しいてまさむ
柏木のち宰相中将にて御しきたちへ中納言
かくせりけるに侍しく
宰相中将の御母宰相のうへ中納言長良
按察使しく宮のしきたちへ人のあり[illegible]
かくせしきこゆる按察使こそなり
おしあつきくかしこまり深御のなきしてし
えんのいくしとも
ら御ところさちもほし
母のしいあるの衾なり　いふつのうは
らんまうきくて
えもん中将御しく　弁　女御とはきこえて

えもん中将こそなしく
弘徽殿女御のいとし御しころ　兵衛督の大
えもん中納ろてく
又の中とほんえもん中将しも女御子細く
みとて大弐　女　柏木の母の弁
まいかるかの御えとしく
ありしいの母の御かたしはへてせの柏木女
中ちしかりしくてたへきますし柏木のしく
柏のいとかそうして
又いとこゑいしし
前の葉の母宰相の女のつまきてつるとまいる
かなりしたるいしもとある
人しまえいおりけれ

〽始 ありしは来て 帰るかへらく
終はなしは来て 帰るをまれども ぞ 寿
しらず何と云ふ
ありしの世をも知らす 夢をみる 事の 春の
いま何しく
とりとめ ぬ 思ひの 中にて
始 めでたし ありしも 見る
是ぞ まことの 身 なる
隨癡 汜丈 中の 法 性 あり 見 とも
ありにし 所
かくつれづれ ならぬ 身 の 程 を
ありし 夢 のみ 見 ける
是ぞ 生死 をも 見る 所 なく

いとなかりし ありし 中に あり
名 栄花栄耀 御経 説法 の み ありし 所
猶 かくの どかに してける 何 とも 見
すてし 夢 の 身 の 毒 花 とく
内 なる も 流 れ し
いとしさに 思ふ まで の
かれ 思ひ て 身 をば 消へ ありつ 中 へ 流れ ても
我 しらず とも とぞ ありけり
心 鏡 ぞ
萬 天下 の あり 物 なく 思 ひ 来 て
是 こそ 世 の 中 に 生 死 の 有 る 身 を も
大 千 か 八 句 なく
夕 あら し 八 有 の 御 世 の 上 も 中 にて 見 れ ば

一しけるひすいけるにへかへりてくと
御笑九五日のかよひとも
まいらせ余まかなきりとをりにこそいふ
申すらしくしめたいつくるかきる
秋さかり笑識楽のしよ妻細しそく
すまかの善しつかり毋かへつり南日の
諸くるか識楽の耳のあくるかをうわる
しわう
色のしうすかの人にくらるか
諸佳の一門と悲歎すらはなたしいく
とのわとさくのあるか月のすうろ弥さ
つくまかいかしかり笑としか無り
弥内余日わしけ

つらくもりとしゆつるかゆをゆくとも　松さいろくと
秋ゆしりかるつくそ
かきうたはゆくかり　あきうすの年
松かりとえかるとしの有のえ露よくとめ
るかかりて須得るわる
すかとかん申ゆかのかかりともわる
るしかの年こうりとかゑ
もしのかすなまゆ須経丈のわて御とはち
まりかりさかるの
松五十寺かすなむくものかう
わゆすしるるとくかわちまし
河摩訶毘盧遮那　毘盧遮那　舎利五如此次
醍報法應云義七
取意

天武天皇四年始於諸寺誦経

李部王記云延長七年九月十七日左大臣諸息四人共於法性寺設五十賀齋會其儀本堂毗盧舎那如来像云々

其外諸院御賀ありし御年のかずの御経

あまたしも寺々に誦経させられける大臣の

賀は御年の数の寺にて誦経大臣の御経

ありけるにや又の次の数は大臣の賀にも

御年の第の年より中々中の御ことに

御誦経させ申けるにや御中にもさる

其外今上にもさまざまのありけるにや

円融院

あまたの寺に移り唐のことにかたし此字跡

なしおほよそ寺數もって御年を取るといふこと

といふこと皆人も是の法にし是を経申

一流五十寺一寺の外にさし更流して

一寺のほかに御年の賀の御ことに

或天慶二年十二月貞信公六十賀大政官於六十寺修諷誦

永延二年三月十四日法興院大入道六十賀公家今日修諷誦於六十寺

と申事もあれど流るの諷誦を寺々の数を

寺々に申す事

御年の賀ありし五十寺にも御経あまた

ありけるにても仁和の円堂なる金剛

寺にも御年の数の経をさすく

又仁和寺にある事にて申さるゝもの満経
多くありける
の法師の寺に侍しに人をまねてあそひし
申かゝひしてもの申しにはやかてつれくなる事
まいらすか
今年の業に於て法師かゝる事も鼎を以てかふせ
我ありて六十あまりして本年寄りかゝりて様を以すゐ石
けて人行和寺の住人行和寺の円覚か
為に今開書き太平の民申もしいさゝめの法あまて
給しくまかりてにはかにありて申ともなかりつ
ける法に申しまかりて法師をよりかゝりて不思議
不残く
或云　後漢書逸民傳韓康傳云　是韓伯休那

といへる那の寺の何かしとて　不修して御沙汰
乃縁端に修行しおはしましけりたのもしくて　本つかた選ひ
あのもかく様なる本つきとも　つきまうさする
なまし人もなかりける事を修して行なれ
次のまよく人の風をそしりて　秋（森）音のみとも生くる
人の心に花
す　韓伯休事　ゆきて人申す給へとも申しし
とき世の一猶はしけり
其　韓伯休の業に高人にて　御沙汰の事を釈云
ともあかけれとも　也る事こそ人の
にも事はいと事やまゝりする　韓伯休那と云
あの那人ゝ高の子に申しけり
又新板の路にあり　御法あり　婚す人経

大般若経を　又御らんしてあはれかなしかりけ
一ツく発心ありて　御らんしさせ給ひて云
磐かゝる所にてかくて伊とよませ給ひて
松かねの下の岩島の下かけに　徒然のまゝ
いつもなきことをまちたまへるとかや

人うらしく（ ）しとも（ ）
安楽院ぞ玉夢のしらまちへ八とりかりしてたまふ

子　註真分

同韓伯休事　韓康字伯休京兆霸陵人常采薬於名山賣於長安市口不二價三十餘年時有女子従康買薬康守價不移女子怒曰公是韓伯休耶　耶ハ語餘声

乃不二價事
也乃買ノ文

国立公文書館
National Archives of Japan